『史の会研究誌』第６号発刊記念シンポジウム

神奈川の女性の明日を拓く

2020 年 12 月 16 日（水）
横浜市開港記念会館

報 告 書

横浜市開港記念会館

目　次

まえがき …… p.1

第1部　講演･シンポジウム …… p.3

第2部　グループの活動報告 …… p.20

当日のレジュメ資料 …… p.29

地域女性史研究会代表
　　折井美耶子の挨拶 …… p.42

閉会の挨拶 …… p.44

まえがき

２０２０年１２月１６日、史の会主催・かながわ女性史研究会共催で、『史の会研究誌』６号発刊記念シンポジウム「神奈川の女性の明日を拓く」を横浜開港記念会館で開催しました。本冊子は、当日の記録集です。

２０２０年は年初から新型コロナによる感染症が広がり、世界中を巻き込んで１００年に１度といわれるパンデミックになりました。４月から始まった緊急事態宣言で日常品を売る商店以外はほとんど休業し、大学も図書館も集会のための会場もクローズになり息苦しい日々が続きました。かつて経験したことのない状況のなかで研究会活動を滞らせない方法を模索しながらの１年でした。

編集をオンライン会議で仕上げた『史の会研究誌』６号ができあがったのが７月下旬。この頃にはコロナ禍もやや落ち着いていたので、シンポジウムの企画を立て、関係者と打ち合わせをするなど準備を進めました。ところが１２月に入り再び感染が拡大し、参加申込者からのキャンセルが続きましたが、感染対策に万全を尽くすことにして開催に踏み切りました。予定していた懇親会は中止にしました。申し込みは１０３人でしたが、当日の参加者は９１人でした。

第１部はシンポジウムで、午後１時開始。パネリストの室谷千英さんと嶋田昌子さんの講演のあと、コーディネーターの江刺昭子を交えてトーク。フロアとの質疑応答で締めくくりました。

第２部は休憩をはさんで午後３時半から。神奈川県内で活動している女性史研究会９グループの報告会で、かまくら女性史の会、グループ江藍、さがみ女性史研究会「さねさし」、女性史に学ぶ会、六会文学サークル、萌黄の会、山口美代子聞き書きの会、かながわ女性史研究会、史の会の順にグループの成り立ちや活動状況を報告しました。最後に、地域女性史研究会代表の折井美耶子さんから感想をいただき、これだけ多くの女性史研究会が活動しているのは神奈川だけとのご指摘がありました。

会場内では、各グループが日頃の成果をまとめた書籍や冊子も販売し、好評でした。開催準備は、史の会会員のほか、かながわ女性史研究会から２人が加わり、当日は受付などを参加グループの方がたがお手伝いくださり、おかげさまで無事終了することができました。

なお、この報告書は、パネリストの発言、グループ報告ともそのままではなく、整理したものです。グループ報告のうしろには、報告と重なるところもありますが、当日配布したグループの資料をつけました。当日の様子は、以下のかながわ女性史研究会のＨＰにもアップしています。

https://kanagawajoseishi.jimdofree.com

２０２１年５月

史の会代表・江刺昭子

主催者挨拶

史の会代表の江刺昭子でございます。

今年は、１９７５年の国際女性年から４５年になります。この年メキシコシティで国際女性年世界会議が開かれ、女性解放のための世界行動計画が発表され、日本でも行動計画を決定し女性行政が大きく動く転機になりました。各自治体でもさまざまな女性差別をなくすための施策が行われたのですが、それから４５年がたちまして、じゃあ女性の地位がどれだけ向上したのか、女性差別がどれほど解消したのか。よく言われるジェンダー指数なんですけれど、日本は世界で１２１位という、極めて残念な位置におります。

それから、ご案内に書きましたように、新型コロナによるパンデミックでわたしたちの日々の生活も大きく変わらざるを得ない状況にあります。とくに女性への影響が大きくて働く女性の４人に１人が影響をうけたと言われています。報道によりますと、女性の自殺者の数も増えております。この状況が今後も加速していく気配ですが、閉塞状況をどうやって切り拓いていくか、みなさんとご一緒に考えていきたいと思います。

史の会についてご存じない方もおられると思いますので、簡単に説明させていただきます。主催史の会、共催かながわ女性史研究会となっておりますが、実は両方ともわたしが代表をしております。

史の会は、３２年前の１９８８年に発足しまして、神奈川県の女性史『夜明けの航跡』をかながわ女性センターで刊行したことからできた会で、地域の女性史を研究してきました。その研究成果である『史の会研究誌』は６冊出しておりまして、７月に６号を出版しましたので、今日はその記念シンポジウムということです。

また明治以降の神奈川の女性のミニ評伝である『時代を拓いた女たち』という本を神奈川新聞社から３冊出版しております。これは故人のみ３５４人のミニ評伝ですが、そのうちのⅠ集Ⅱ集は史の会、Ⅲ集はメンバーが入れ替わりまして、かながわ女性史研究会の名で出版しております。Ⅲ集は去年の７月に出版しましたので、その発刊記念も兼ねて共催ということにいたしました。

１部と２部に分けておりまして、１部はシンポジウムで、県の女性行政に関わってこられた室谷千英さんと横浜で市民活動を続けてこられた嶋田昌子さんをパネリストにお招きしております。

休憩をはさんで２部は、県内の女性史関連の研究グループ９つに発会の経緯とか活動報告をしてもらいます。研究グループと言いましても専門家の集団ではなくて、主婦が中心の生活者研究者の方たちの集まりです。わたしたちの母親や祖母たちがどのような教育を受けたか、どんな仕事をし、どんな暮らしをしていたのか、県内各地域の高齢女性から聞き取りをしたり、資料を集め、取材を重ねて、明らかにする作業を続けてこられたグループです。どれも地味な研究活動なんですが、主婦として家事や子育てや介護を続けながら定期的に集まって、共同学習を続けてきました。その成果である本や冊子を会場の横で販売しておりますので、休憩時間にお手に取ってみてください。

第１部　講演・シンポジウム

パネリスト・嶋田昌子

パネリスト・室谷千英

コーディネーター・江刺昭子

前置きが長くなりましたが、これから１部のシンポジウムに移ります。

まず、室谷さんと嶋田さんに続けてお話をしていただきます。お２人については、『史の会研究誌』６号で聞き書きをさせていただいておりますので、ここでは簡単にご紹介いたします。

室谷さんは高校生のころから福祉の仕事をしたいと思われて、大学卒業後の１９６１年に神奈川県庁に入庁され、福祉分野の仕事を経て県の女性行政に取り組んでこられました。１９７５年の国際女性年をきっかけに県民部県民総務室に婦人班が設置され、そこが県の女性問題の専管、専門に取り扱う部署が初めてできまして、そこに異動して県立婦人総合センター、現在のかながわ男女共同参画センターの設置にも関わってこられましたので、その経緯を含めて、女性行政に関わられたお話をしていただく。それから県で初めての女性副知事になられました。全国では６番目、外部からではなく、庁内からでは初めての女性副知事です。県庁を退職されたあとは県立保健福祉大学の副学長。現在は横須賀の日本医療伝道会の常務理事をしておられます。そのあたりのお話も今日はしていただきます。

それから嶋田昌子さん。横浜の本牧にお住まいで、３代前からのハマっ子という方です。３日住めばハマっ子という言い方がありますが、生粋のハマっ子というわけです。結婚なさって本牧での活動から始めてさまざまな市民活動に入っていかれました。わたしはかなり長いお付き合いになりますが、いつも感心するのは、すごいアイディアウーマンで、いろんな素敵な思いつきをなさる。素敵な思いつきもそのままだと夢で終わってしまうのですが、それを着々と実行していかれる。しかもおおぜいの人を、行政を巻き込んでリードしていく。すごくパワフルです。それを楽しみながらやっておられる。そのなかでも最も大きな活動が横浜シティガイド協会で、今日はそのあたりを中心に語っていただきます。

Kaz.

パネリスト・室谷（むろたに） 千英（ちはな）

ご紹介いただきました室谷です。よろしくお願いいたします。

わたしは神奈川県の女性行政に関わってきた経験をお話しするということで、今日お招きいただいたわけですけれど、実は女性行政に関わったのはもう四十数年前のことですが、現在の女性の置かれている立場は、本質的なところでは、あまり変わっていない。わたしが女性行政に携わっていたころは、国際婦人年という世界的な取り組みのなかで、皆女性が燃えていたのではないかと思います。

１９７５年というのは国際婦人年で、それがきっかけで７７年に神奈川県で女性の専管の婦人班が県民総務室の中につくられました。女性の専管ができたのは全国的にかなり早いことですね。神川県議会で女性の議員さんたちから是非女性行政の部署をつくれという要望が出たことが一つ。それから神奈川県内で婦人団体がいくつか活動しておりまして、その団体の代表の方がたからも女性問題を扱う専管をつくれという要望がありまして、そ

れを受けて婦人班ができたのです。

しかし、初めは女性行政を扱う組織といっても何をしたらいいのかが、なかなかわかりにくかったです。その時は婦人問題と言っておりましたけれど、婦人問題が何を意味するのか、よくわからないまま、職員は男性２人、女性２人の４人が配属されて女性行政の窓口ができたということです。そこでまず何をしたらいいかということを勉強しました。そのなかで、江刺さんたちがやってらっしゃるように女性の歴史を学んで、どんな分野で女性をとりあげていったらよいかを研究しました。

その時、国際婦人年の行動計画をまとめたものがあって、女性団体の方がたがそれを学ぶ会を進めていらっしゃいまして、そのなかに行政の担当者も入れていただいて、女性問題を行政でどう扱ったらよいかということを考えました。

なぜそういうことを言うかといいますと、神奈川の女性行政が市民の、とくに女性団体の方たちと共ににあったということです。一緒になって女性行政を取り上げていったということでございます。また、何をしたらいいかということを考えるために庁内の女性に関係のある部局を全部集めまして婦人問題の研究会を立ち上げて、それぞれの部局で、どんな女性問題があるか、まず検証していった。それが始まりでございました。

そのあとで、女性団体の方たちと話しあいながら、女性問題を解決するためのプログラムをつくる。１つは女性の地位向上のためのプランを、もう１つは女性の方たちが活躍できる場をつくる。それから県内全体の女性団体を巻き込んで女性問題を考える団体をつくろう。その３つが一緒にできあがったのが１９８２年でした。

各県の婦人問題の窓口をみますと、教育庁のなかの社会教育課、昔からそこの管轄で活動していらっしゃる地域婦人団体連合会や婦人会館が中心というのがどこの県でも当たり前でした。そういう社会教育関係の女性センターや女性の活動ではなくて全部の部局を網羅して女性問題を広く考えるという意味で県民部のなかに女性のセンターを位置づける形をとったのが神奈川県の特徴です。福祉と消費と社会教育、こういう分野を全部網羅した形でつくったということです。もう１つはかながわ女性会議が県がつくりました女性プランの進行管理をやったということで、毎年、県の職員を招いてどこまで進んだのですかというチェックをやった。女性問題を全体でとらえる姿勢で終始してきたことと、女性団体の皆さんと一緒に歩いてきたということが、自慢できるのではないかと思っております。

先ほどおっしゃいましたように、今ジェンダーの地位が世界のなかで１２１位と言ってますね。調べてみましたところ、今、４７都道府県のうち女性の知事が２人しかいません。全国で７９市の市長は２７人が女性です。それから、東京の特別区が２３区で１人、全国の町７４３のうち８人。全国の村１８３のうち村長はゼロ。

こういうふうに意志決定のできる場にいる女性が少ないということが今現在も続いている。４０年もたってもまだ続いているということは大変に残念に思います。ただ一つ特異な例がありまして、実は兵庫県の尼崎市の市長さんは、２００２年から長期１８年ずっと女性なんですね。それは後押ししている市民団体があるからで、その団体が女性の市長をずっと１８年も続けて応援している。こうして地域の女性の方がたが動くことが、組織

やシステムを変える大きな力になっているんだということを示しているのではないかと思います。

パネリスト・嶋田（しまだ） 昌子（まさこ）

今日のチラシを拝見しながら、肩書がなくていいんだなあと思いました。というのは、なんで今日わたしは、こんなところにいるんだろうとさっきからずっと考えていました。室谷さんが、国際婦人年のところからお話をなさいました。その当時のことを考えますとね、わたしは母親として、身近に知ったのが国際児童年だったのです。「横浜いいじゃん会」で子どもたちの遊びをいろいろ考えるなんてことをやってました。

国際婦人年がきっかけで１９８２年に江の島に婦人総合センターができ、本当に輝かしくぴっかぴかに光っていました。そのころ地域のなかの活動が「トベラ学級」を通して横浜市職員と知り合ったのがきっかけで、わたしは横浜市中区の社会教育指導員という役割を拝命いたしました。そこで、婦人総合センターの見学もあって、あ～と思ったのです。そのあ～の元に自分が婦人である、当時は女性であるというより婦人という言葉が強かったですね。そういう婦人感覚がないまま地域のいろいろな活動に関わってまいりました。

実は社会教育指導員というのは今でも横浜の場合はそうなんですが、各区に１名ずついて、中区役所のなかにデスクがあるんですが、女性団体の方たちが、いろいろと出入りする。わたしが関わっているデスク、これは女性の社会教育畑の人だけ。ところがお隣のデスクには違う女性たち、当時の言葉でいう消費生活の団体の人たち、もう１つ向こうのほうには婦人団体。これが全く独立して、交流もなかった。なんだか面白いんだなあと初めは思っていました。そのうちに横浜にも「フォーラム横浜」というのができる。ああ横浜でもそうなんだなあと、目がちょっと広がったんですね。「フォーラム横浜」という建物が、戸塚にできましたよね。

あれ、これを施設の名前にするんだったら、役割としてのフォーラム、これを中区の女性団体の横つなぎにしたらどうなんだということで、きらきらと輝いている江の島を見て、次に陽の上がっていく「フォーラム横浜」を見ながら、中区で「中区女性フォーラム」というのを立ち上げました。

では、何をやったか。女性を取り巻く問題を自分たちでいろいろ考えよう。福祉もある、家庭のなかの役割分担のこともある、そういうことを１つずつ分科会にして、話し合いました。で、話し合った結果が３冊の冊子にまとまっているのです。結果を皆さんに報告するのにお芝居をやっているんですね。自分たちが演じるんですよ。お母さんやったり、お父さんやったりしながら、最後には「中区を故郷（ふるさと）に」というビデオをつくったりしました。その最終年、１９９０年には高齢化社会を考える中区女性の意識調査をまとめました。アンケート用紙を皆で分類して、あの当時、パソコンなんてありませんから、電卓でこれは何パーセントこれは何パーセントというふうにやって。ではこれからの社会、わたしたち

はどうすればいいか。

当時の社会教育というのは、ほとんどのグループを女性が占めています。このアンケートの結果、これからの地域活動のなかで、女性が、というのはおかしいよね。私たちの結論は、言葉が悪いですが、男の子たちも入れてあげようよという感覚なんです。それは社会教育のなか、あるいは婦人団体のなかに男性も巻き込もう、主語はあくまで女です。そういう感覚で、みんなで話し合いました。

わたくしはそのころ地域のなかで洋館の保存活動というのもやってまして、その講座を年間連続でやると１００人位集まるんですよ。トータル５００人なんですが、実は連続講座ですから同じ人がおいでになる。ということは、分母が１００に戻っちゃう。もっと広げなくちゃあ。そうこうしているうちに、横浜の人って横浜大好きと言うわりに、実はあまり横浜をご存じない。よっしゃここだというので、わたしたちが横浜を学ぶ、学んだ結果を社会に還元しよう。今のシティガイド協会はコロナ禍で八方塞がりになっていますが、学んだ成果を、当時は中区、今では横浜市に、つまり自分たちの足元の人たちに返そう、こういう団体を立ち上げました。

いろいろ苦労がありました。出発を行政に支援してもらおうとしたのですが、行政というのはね、最初はどんなことをやりたいのか。じゃあ「どうしたら」の「どう」が全てイエスに変わるまで、理屈を合わせないといけない。当時の社会教育法のなかにはボランティアという観念がない。社会教育は学び一方、何とかこれを打破するには社会教育法という法律を変えねば、これは難しいですよね。文部省にも出向きました。そうしたらある方が埼玉県の武蔵嵐山に国立女性教育会館がありますよね、そこでは学んだことをボランティアとして案内してるよ、それが『社会教育』という雑誌に出てる、というアドバイスをくださいました。読んだら、先駆的事例と書いてあった。やったあ。それをもって横浜市の教育委員会の社会教育指導主事のところへ行った。それから中区の社会教育主事にも話をしたり、そうするとこれなら理屈が合うということでお金を出していただいて、シティガイド協会というのを立ち上げました。

では、どういうメンバーを集めるか。わたくしはワイワイガヤガヤやる、つまり学びというのは１人の学びもあるけれど、みんなで学ぶ、みんなで活動する、これって楽しいよね、これが根底にあります。１人だったら人間とっても弱い、でも全員だったら強くなります。

それからもう１つ。つまりシティガイドを立ち上げるんだったら、男の子も入れてあげよう。男女半々にしたい。これがシティガイドがある意味では長く続いた理由と思っています。それからね、どんな人が来るかわからないから政治からは距離を置こう、などがあります。学んだことを還元するのですから、学ぶということと活動は車の両輪と考えよう。

それから会の名称を、最初から「横浜シティガイド協会」としたい。つまりまだＮＰＯ法人などができていない時代に、法人化したいと思いました。その根底にはいつまでも役所にくっついているのはやめよう。図々しいですね、立ち上げの時に是非お金くださいと言ってるんですよ、しかも普通１０万円の講座なのに３倍いただきました。そう言ってお

きながら、行政との距離を対等にしたいというんですから。

どうするか、有償でガイドをしたい、今回初期のころの７人の侍といっていますが、メンバーそれぞれにいろいろお話を伺いました。そしたらば、「嶋田さんは最初から有償と言ってたよね」。実はこれで、大切な１人のメンバーを失いました。最初にお声をかけた方は、歴史に強いメンバーお２人。お１人はとっても英語が堪能で、娘の小学校の同級生のお母さん。それからその方が一緒にやっている歴史のメンバーの男性。彼はボランティアが有償はおかしい。ボランティアは無償であるべきと主張して、実はその人に一番期待していたんですよ。高校の後輩だし、話も合うし、自然に対しても考えが似てる。でもボランティアの考え方の違いで袂を分かちました。今から三十数年前のことです。どうでしょう、皆さんもそのころいろいろな活動を始めていらっしゃったと思います。そのなかで、有償無償のことをお考えになったことがおありだったのではないでしょうか。つまらない思い出話をしてしまいましたが、この辺で終わらせていただきます。

３人でトーク

江刺　市民活動に関わる大切な問題点をいろいろお話しくださったので、順に話し合いを進めていきたいと思います。

室谷さんは行政の立場から、嶋田さんは市民としての立場からの活動のお話を聞いていて思いだしたんですが、県の女性センターは、教育委員会ではないんですね。県民部の管轄で、そこに婦人班ができて室谷さんが関わっていかれる。県立婦人総合センターは女性という括りで、縦割り行政を横にして企画調整部、生活科学部、福祉部、婦人労働部、生涯学習部という５つの部門があったんですね。そのなかの生涯学習部が開いてくださった講座を受講した人たちがつくった会が史の会の流れになります。

ちょっと史の会のことをお話しさせてください。室谷さんがおっしゃった女性プランの行動計画の一つに女性史編纂というのがあって、女性センター開館まもなくから、その計画が実行されました。当時の知事は長洲一二さんで、初代の館長は金森トシエさん。読売新聞の婦人部の部長からスカウトされて神奈川県の参事になられた。大変お顔が広いし、次々と新しい企画を実行される方で、わたしは金森さんに引っ張られて地域女性史に関わるようになりました。

そして１９８７年に『夜明けの航跡』ができるんですが、そのつくり方がユニークでした。神奈川県史や横浜市史など自治体史がたくさんありますが、そのほとんどは男性の歴史学の偉い先生をトップに据えて、その下にピラミット型に弟子筋の先生方が編集委員をして、神奈川県史などは何十年も、何億円もかけてつくっている。で、県レベルの女性史は神奈川県が初めて取り組んだんですが、そのやり方がユニークでした。専門の女性史家だけでなく、県民女性のなかから女性史に興味がある人たちに集まっていただいて、ワー

キンググループをつくって、県と専門家と県民女性の三者が共同して県の女性史を編纂しました。これは住民参加でつくった初めての女性史で、神奈川方式と言われて全国に広まりました。

いずれにせよ、当時まだ目ぼしい女性行政がないなかで、女性の活躍を促す拠点ができたということは非常に大きいことでした。一方で横浜にはフォーラム横浜ができて嶋田さんたちはそれを上手に利用していかれる。

嶋田　フォーラムという名前に惚れた、という感じですよね。

江刺　婦人総合センターに比べると、ネーミングがすごい。嵐山も国立婦人教育会館だし。

嶋田　固い名称ですよね。それに対してフォーラムという名前を付けた横浜のほうは、いかにも国際都市という感覚がある。最初よりあとのほうがかっこいい名前を使える。その名前がかわいく、とてもハイカラで。わたしたちはその名称を地域のなかで使ってソフトな女性のつながりをつくりました。一方１９９０年に『横浜を生きる女たち』なんて本も皆とまとめているんです。戸塚のフォーラムに対してこちらは教育委員会に付随している施設、正確には横浜市教育委員会婦人会館というのが並立していたんですね、そこから出しました。それが今は一緒になって横浜市男女共同参画推進協会が運営しています。

江刺　別々にやっていたということですか。

嶋田　そうなんです。わたくしは両方に関わって、横浜女性フォーラムの運営委員として、でもまあよく遊ばせていただいたと思います。そこで新しい友達ができ、明治時代の『横浜貿易新報』の広告欄から職業婦人の求人広告を抜き出してカード化し、これをベースに「横浜の職業婦人」というビデオをつくって、実は売りました。

江刺　そうですね。女性センターはすばらしい「場」でしたね。わたしの場合はかながわ女性センターですが、いろんな講座とか女性監督の映画祭とか、江の島女性会議とかがあって、あそこに行くと誰か知った顔に会うんです。そこでまた何か一緒にやりましょうと広がっていった。やはり集う「場」があるというのはすごいことで、そういう「場」をつくってくださったのはありがたかったと思います。

嶋田　「場」としてですよね、江の島の広い海とヨットがあって…。

江刺　橋を渡るのがちょっと大変でしたけれど。風の強い日は飛ばされそうで。

室谷　江の島の女性センターの話が出ましたけれど、誰が島に持っていったかというのは、皆からよく聞かれるんです。ちょっと交通の便が悪い、江の島のあの橋をずーっと渡って行かなくちゃならない。そういうこともあるんですけれど、県の土地だったということがあったんですね。土地から買い上げて建物をつくるというのは相当の予算が必要になる。県の土地で空いているところがないかと県中歩き回りまして、津久井や相模原のほうにもあるとかいう話がありましたけれど、神奈川の人口の丁度半分が藤沢になるんです。人口重心と言っておりますけれど、まあ真中がいいだろう、そういうことで、まず知事が場所を吟味しまして、やっぱり建物を建てるんだったら眺望のいいところがいいだろうと、２つの理由であそこに決まったということです。

江刺　けれどもあそこを撤退する時は、東日本大震災の後で、津波が来るからというので

あっという間に移転が決まってしまいました。２０１５年に鵠沼の合同庁舎に入って８分の１の規模に縮小されてしまいました。２０００年代に入ってから女性問題はもう終わったみたいなバックラッシュが大きかったですね。

次にお話を進めます。さっき嶋田さんのお話のなかに、「洋館探偵団」という市民活動をしていくなかでグループづくりをして、その時に男女を混ぜた。嶋田さんが続けてこられたシティガイド協会も男女半々で成立している。わたしは別に男性が嫌いじゃないんですけれど、女性史というとやっぱり男性の方は来られないんですよね。だからネーミングというのも大切なのではと思います。「中区フォーラム」は女性が付いてなかった？

嶋田　中区はね、「中区女性フォーラム」。その活動のなかで、高齢化社会を迎えるのにどうしていくか、それは男社会、女社会というのではなくて、一緒でなくてはまずいよね、と皆が思いました。あともう１つ、さっきも「中区を故郷に」というビデオをつくったとお話をしましましたけれど、わたくしたちは自分の足元をやらなきゃという感覚が強かったんですね。

江刺　それまで女性ということはあまり意識してらっしゃらなかった？

嶋田　ちょっとね、今言われると、フフフという感覚があります。ただ足元、これを意識するということが、シティガイドの１つのきっかけにもなったかなあと。きっかけって面白いですよね、わたくし江刺さんと一緒にお仕事をしたのは、当時、横浜ランドマークタワーにもう１つ「フォーラム」がオープンする時の写真展で、そのタイトルが「国際交流のパイオニア　横浜の女性」。普通、女性というのが前に出そうなんですけれど、女性が後ろなの。

江刺　確かにそういうタイトルでしたね。あの写真展は、県内あちこち回りましたね。とってもいい企画だった。

嶋田　個人的なお話ですが、江刺さんと１つ違いだってこと、今回初めてわかったんです。江刺さんの樺美智子さんのご本が文庫本になったので、改めて今朝も読んでみたんですが、６０年安保の時、１年生だった、早稲田のね。わたしは日本女子大の２年生。で、樺さんが４年生、ということがわかって、ああ同じ時代の空気を吸ったんだなあ。わたくしたちは政治の時代に生きて、そこから社会活動に入っていったんだなあと思いました。そうだからこそ、活動のなかに政治を入れない。これ男だったら、あんまり考えないんじゃないかなあと思うんですけれど。

江刺　確かに政治が入ってくると意見が分かれますから、難しい問題がある。でも否応なく入ってきてしまうのが実状かなと感じております。話を戻すと、嶋田さんがおっしゃっている男の子も入れてあげるというのはいい。例えば、横浜に横浜郷土研究会という６０年くらい歴史のある会があって、そこに入っていたんですが、リタイア後の歴史好きな男の人が多くて、女も入れてやるという感じ。何を見ても語っても男の視点なんですね。そういう男性たちもシティガイドに入っていらっしゃるのでしょうが、のっとられない？

嶋田　いやあ、最近男性のほうが多くて、ここでまた女性の問題になるんですが、女性は夫が入院し、これで辞めちゃう。孫を預かることになりました。これで辞めちゃう。男の

人は、しばらく休むけれど帰ってくるからねと言って辞めません。男のほうが倍になる、という結果なんですよ。やっぱり女性問題が入っているんです。

室谷　男性と女性との区別の問題が出てきておりますけれど、本来ならば、両性一緒に１つのことを考える、当たり前なことなんですよね、それがなんで女性集団でなければならないか。まあこういう問題があるのと同時に、今すごく男性学というのが流行ってきている。男性も縛られて、男性だからと言われて、自分を抑制しなければならないということも起きていると聞いております。ただ、最初に女性問題を取り上げた時は、女性の社会進出とか、役割を発揮していくとか、そういう課題があって、女性自身がこれを考えなければ実現できないということもありました。

　それと、男性が一緒に入った場合には、男性は男性の立場でものを考えるので、なかなか女性問題としてとらえてもらえないということもありまして、女性問題の初期の段階では、女性グループで女性の問題を考えましょうと、そういう形になったのではないかと。今はむしろ、両性で考えようという活動のほうが多くなっているとわたしは思います。

江刺　今、男らしさからの解放みたいな、男性も家族を養っていくことが当然みたいに刷り込まれていて、息苦しさを感じている人も沢山いらっしゃる。ですからこれからは、共同してやっていくということですかしら。

嶋田　理想論ですかね。シティガイドの悪しき実例をちょっと暴露しますね。数年前、横浜山手の西洋館２３４番館の運営をわたしどもが受けました。運営をするというのは、管理運営ですから、掃除もある。もちろんですよね。トイレ掃除もありますと言ったとたんに僕は箒なんて持ったことがない、鉛筆より重いものを持ったことがない、こう言われて、一切トイレの掃除をしてもらえませんでした。で、こっちもね、若かったから、そこをちゃんと説得すればいいのに、やったるぜという感じで、トイレの掃除にわたくしが行く。うちのトイレの掃除なんか嫌いなのに行きました。そしたらば、その時に中区役所の課長と職員の方、手伝ってあげるからと言われたんですね。行政とのつながりって変なもんですね、わたくしはトイレの掃除で信頼を受けました。さっきの文部省の話もやっぱりおばはんがくれば文部省も何とかしなくてはと思ったんだと思うんですが、社会教育法なんて法律があるけれど、市民活動ってある種の粘り、根底には進退をかけるみたいなところがあったかな。

江刺　男性と一緒にやっていくのは難しい問題があると思いますが、そういうふうに仕向けて、男性も生活者として自立しないとご本人が多分困られるだろうと思います。

　ここでまた話を変えます。嶋田さんのシティガイド協会は、無償ボランティアじゃなくて、有償でやっていらっしゃいますよね。普通ボランティアというと、無償でやるという意識がわたしたちにあるんですけれど、シティガイド協会は、まず最初に時間をかけて横浜をちゃんと案内でききるような講座を受講してもらって、案内をする時には参加者から会費をいただく。そんなに高くないでしょうけれど。

嶋田　ほんとぽっちりです。

江刺　でしょうね、でも全くタダというのではないというのは大きいですね。

嶋田　やっぱりそれは、ほんのわずかでも責任が伴う。もちろん保険を掛けるとかそういうことも出てきます。でも１つは自分がやった行為が評価されるっていうことですね。初めはリタイアした男性が入ってくるのを意識して、ある程度の交通費ぐらいの実費が出せるようにしたんですが、これは男性に限らず出すということが必要です。もう１つ、くどいようですが、行政から補助金をもらうとどうしても行政に対して従になる。委託費はうちもいただくし、年間こういう事業をします、ください、出しましょう。でもそれ以外は、対等にいくには、自分たちの蓄えがないとダメだなあということです。

室谷　有償のお金の出どころはどこになるんですか。

嶋田　コロナの前の段階ですが、ガイドをするとだいたい２５００円いただきます。それをガイド個人と会の運営費とに分けて、会員個人に１５００円、会の運営費に１０００円としています。シティガイドはそういうふうにして立ち上げたのですが、平成８年かな、全国大会をやりました。日本各地のボランティアガイド２００団体、５００人近い人が集まった。その時、壇上で今の話をして、わたしはここで、とことんつるしあげをくいました。何でボランティアなのに有償なのかと。その時わたくし、質問した方に伺ったんですね。素敵な法被をお召しですけれど、それどうなさったんですか、と言ったら彼がこれは役所がつくってくれたんだって。でも役所がつくるのは税金でしょ。税金から回るのと本人が払うのと…と言ったとたんにフンという顔をして。それから毎年全国大会があるたびに、横浜の嶋田をやり玉に挙げろということで、しょっちゅうやられて、数年続きました。そのうちにフンという人が変わっていった。現在は全国のほとんどのボランティアガイドが有償でやっています。もう１つは、役所がだんだんお金を出さなくなりましたから、市民活動も自立することを考えないといけないと思います。

室谷　有償ボランティアの問題というのは、ずいぶん前から言われておりまして、自発的なボランティア活動が有償であってはいけないというのが主流の考え方だったんですけれど、ある時代から有償もあり得るという考えかたに変わってきております。わたしが考えますのは、無償の場合、昔から慈善事業と言われてきた福祉の関係で、施設に入所している人たちにお茶を出してあげるとか、おむつをたたむとか、洗濯するとかいう身近なところで、本人が負担できないものをやっていたというのが無償のボランティア。今言われている有償のボランティアというのは、多様な生活の変化で社会のシステムが、組織だけではできなくなっている。今まで行政や企業が担っていたものが、個別具体的に多様化しているなかで、そうそうやれなくなってきているというなかで、ボランティア活動も多様化していったのではないか。そういう場合は、受ける本人がある程度の金額を負担して、ボランティアをやる人たちが自信を持って、そして責任をもってやれるようなそういうシステムがあってもいいのではと、わたしは思います。

江刺　今日は女性史研究会の方もたくさんみえているんですけれど、行政が関わって編纂した自治体女性史のあとにできた、いわゆる自主グループが多いんです。ほとんどどこからもお金をもらわないで活動しています。史の会も前の女性センターと共催でよくシンポジウムなどをやりましたが、部屋代がタダ、チラシをタダで印刷させてくれる。それだけ

で、あとは自分たちでお金を出しながら本を出版したり、イベントをしてきたんですが、今はそれもない。女性史研究は自分たちの勉強であると同時に、出版や講演会などで成果を地域に還元することで地域を豊かにする運動だと思ってわたしはやってきました。嶋田さんたちの市民活動とは違うんですが、行政と対等でかつ、補助費をもらってやっていくという考え方もありかなと思います。

嶋田　ちょっと言い訳をさせていただいてよろしいでしょうか。嶋田が関わっているグループは全部有償か、それは嘘ですからね。例えば、今の山手の地番というのは居留地の時代から変わっていません。そうするとそこに誰が住んでいたか、当時、年一回刊行されていた住所録にあたると出てくるわけで、でも厚い本をいちいちあたらなければいけません。これをオープンデータにしています。これは大変手間がかかるし、出費も多いですが、そこのグループはそれによって対価をいただいているわけではありません。わたくしたちは、そのグループに年間６０００円の会費を払って、やっております。

江刺　有償無償のボランティアの話に関連するんですが、室谷さんは県庁で主に福祉の分野を歩んでこられて、その後、保健福祉大学の副学長をなさって、現在は横須賀の衣笠病院の理事でいらっしゃる。そのほうのお話を伺います。

無償ボランティアというのは、長い歴史を持っている。とくに横浜は、嶋田さんみたいなパワフルな女性が昔からいらっしゃって、明治の中頃に中区根岸の丘に女性たちだけで横浜婦人慈善病院というのをつくるんです。二宮ワカを中心にした宣教師やクリスチャンの女性たち、あとから貿易商の妻たちが関わってきます。明治政府は富国強兵政策をとって福祉のほうを顧みる余裕がない。当時の横浜は大きな格差社会で、一家総出で働いても食べられない人たちが沢山いた。一方で山手周辺に豪邸を構えている人たちと両方がいて、不就学の子どもたちの学校をつくり、病気をしても治療を受けられない人のために寄付を集めたり、バザーをやって、病院をつくるんですよ。そこで横浜共立女学校を出てアメリカに留学した女性のお医者さんが治療するんです。明治の終わりころには維持できなくなって、横浜済生会に全部寄付するんですが、当時の代表的な慈善事業なんですね。

そこで問題なのは、いわゆる慈善事業とか福祉事業を明治から担ってきたのは、ほとんど女性だということです。男性は経済活動優先でイケイケドンドンで、その果てに戦争。その尻拭いというと言葉が悪いけれども、落ちこぼれた人たちを全国的に女性が無償のボランティアで支えてきた。それはいわゆる性別役割分担で、男は外で、女は家庭でということで、育児や介護は女が受け持ってきた、その延長線上で女性が無償で慈善事業に関わったんですね。

それがずっと続いているものですから、看護や介護の仕事が社会化され、男性が参入しても、今もこの分野は圧倒的に女性が多数で、だからだと思うんですけれど、看護師とか介護士のお給料が非常に安い。しかも非正規が多い。そういう人たちが、今回のコロナ禍で、非常に大きな影響を受けてオーバーワークになっている。最近看護師さんが足りない、足りないと言いますが、医師よりも看護師のほうが社会的地位が低いことで、資格を持ちながら働いていない看護師さんが多いのではないか。そのあたり、室谷さんが専門でいら

っしゃるので、お話していただきたい。

室谷　医療や福祉に携わる女性の問題、第一線で働いておられる方の大きな問題です。今おっしゃったように、家庭で家事をする、子育てをするというのは女性の役割だという考え方が底辺にありますので、そうしたら女性の集団というのは経済的な価値でいえば低く見られているのが現状であることは間違いない。

実はわたしが今関わっております病院は、２５１床の中型の病院で、コロナで大変大きな問題になっております。８月にＰＣＲの検査で患者１人が陽性という結果が出ました。病院クラスターが発生したほかの病院から転院してきた患者さんで、陰性だからと言って転院してきたんですが、１週間くらいたって陽性になりました。われわれの病院はコロナの受け入れ病院ではなくて協力病院で、横須賀にはコロナ患者を受け入れる大きな病院が３つございます。

８月の終わりに初めて出まして、後から同室の患者やほかの病棟に飛火したりして、関係者９８人のＰＣＲ検査をしたら、患者１０人、職員３人が陽性という結果がでました。患者はほかの病院に移すことができますが、職員は検査をして結果が出るまでの間は自宅待機になりますので、自宅待機の職員がいっぱい出てしまった。そのなかで、コロナ患者の転院まで２４時間看護をしなければならないし、ＰＣＲや抗原検査というのもあります。その場合、看護師は２４時間、防護服を着たままなんですね。その間のことを看護師さんたちに聞いてみましたら、自分が罹るんじゃないかという不安と、２４時間寝ないで、しかも防護服というのはすごく重たい、大変重労働なんですね。さらには、マスコミでもよく言われておりますが、子どものいる看護師さんは、子どもを保育園で預かってもらえない、そういうふうな方もいらっしゃいました。

そういうことで看護師の負担が大変大きいのが現状なんですけれど、うちの病院のなかで、診療に携わっている職員が、常勤・非常勤合わせて４５５人くらいのうち、常勤で女性の割合は８０％、非常勤を入れましても７０％くらいを女性が担っております。ですから女性を大事に育てていかなければ、福祉施設もそうなんですけれど、病院はまわっていきません。そういうなかで女性が働きやすい職場をどうやってつくっていくかということが大事な問題になってきております。今マスコミで看護師が足りないとか言い出しましたけれど、これは昔から看護師は大事な役割を担ってきておりますけど、社会のなかでの認識と言いますか、あまり高い評価をしてこなかったという歴史があります。

江刺　看護師さんは医者と比べると、社会的地位が下になりますよね、医者の仕事も看護師の仕事も非常に大切な仕事だと思うんですけれど、収入の面でも格差がある。その辺はどうにかならないのでしょうか。

室谷　なかなか難しいですけれど、専門職に対する価値を決めている所で医師と看護師の間の差、それから検査技師との差にも出てきていると思いますけれど、これに対して皆が、同じ仕事をしているじゃないかということを、国のほうに要望していく必要があると思います。看護師さんについては、前からみると格差が少しずつ狭まってきております。けれどホームヘルパーさんとか介護士とか福祉に携わっている人は今でも大変低い。これも声

を上げていく必要があるんじゃないかと。

実は今回、医療機関の問題がクローズアップされてきまして、医療機関の職員に対して、慰労金というのがありました。第１次は、コロナ病院のほうには２０万、１人につき医師、看護師それからコ・メディカルの人に対して２０万。それからうちのような中型の協力病院の職員に対しては、医師、看護師、コ・メディカルが１０万、半分です。今回第２次で、コロナ患者に関わった人は１日１５０００円、看護師が半分で５５００円、不当ですよね。差をつけてきたのはなんでかというのは、ちょっとわたしは理解できないんですよね。どうしたらいいかと今言われましたが、声を上げていくしかないんじゃないかと。先ほど言いましたように、うちの病院でさえ、医師と看護師でみると、看護師のほうが大変なんですよ。コロナ患者に対応するのに、なんで差がつくのか。この際おかしいと思った人たちが集まって、そういう疑問を突き付けていく必要があるんじゃないかと思っております。

江刺　看護師さんだけではなくて、福祉関係にはそういう問題があるんですけれど、介護士の問題だと、介護保険の制度を変えていかなきゃいけない。そうなると、最初に室谷さんのお話のなかで、指導的地位につく女性をもっと増やすことが、そういう問題の解決に向けての１つの方法になるんではとおっしゃいました。室谷さんは今の病院の理事長でいらした時に、院長は男性なんだけれど、副院長に女性、看護師さんだった方を副院長にされたという。今は違うけれど、それは室谷さんがそういう立場におられたから、それができた。看護師さんから副院長になるというのはあまりないことですよね。

今、日本では政策決定をする国会議員の女性割合がひどいんですが、司法も経済の分野も、指導的な立場にいる女性が非常に少ない。それを変えていかなければならない。そのためには選挙制度を変えるとか、候補者をクォータ制にするとかにしないと、変わらないんじゃないかなと思います。

では嶋田さん、室谷さん、最後に一言ずつお願いいたします。

嶋田　最後と言われると、いったい何を申し上げていいのやら、あれもこれもと思ってしまうんですが、実は歴史に関わるグループにいくつか関わってきて、歴史というと問題点が２つあると思うんですよ。歴史というと必ず本を読まないと、図書館に行かないといけない、そうなんだろうか。つまり歴史学のなかにももう１つ民俗学というのがあって、柳田国男とかですよね。あれをもう少し見直すべきではないかと思います。だからシティガイドの学習では、一番最初は基礎講座といって学校形式の講座をやります。その次がグループ学習をするんです。つまり、グループで学ぶことの大切さ。ガイドをするとグループで動きますから、本の学習ではなくて、グループ学習。もう１つが、そのなかでどういうふうに学ぶかということを身につけていきます。人から人へと伝えられたものとか、土地に残るものをガイドのなかに入れていかないといけないのではないかと。つまり文字だけをあまり信用するなということを、私は学習のなかで、いつも感じています。で、もう１つはやっぱりみんなで学ぶって楽しいよねというのがあります。今日は女性史の方がいっぱいいらっしゃるんで、やっぱり申し上げたいなあ。以上です。

室谷　いまこのコロナ時代になってですね、ウィズコロナといつておりますけれど、もの

すごく生活の様式が変わってきたと実感されます。前から価値観の多様化というのは言われてきておりますけれど、生活が変わってくるというなかにあって国を動かすリーダーや地域のなかのリーダー、そして組織のなかでのリーダーがこのままでいいのかなあということを改めてわたしはいま考えています。今までのように男性がリーダーであった場合には、どうしても組織を前へひっぱっていこうとする、経済を成長させようとする、そういった力のあるリーダーが望まれていたと思います。ただこれからは１人１人の生活が変わってくるなかで、生活者の意識を持ったリーダーでなくてはならないし、市民とか地域とかみんなの考え方も吸い上げて、皆で考えるという、そういったリーダーのほうが求められてきているのではないかと考えております。

生活者の意識っていうのは、男性も持っていらっしゃいます、子育てしている男性もいらっしゃいます。ただ全体のなかで、生活者の意識はやはり子育てをしている女性が多いです。人の感情とか考え方というのを敏感に読み取れるのはやはり女性ではないかと思っています。それで女性のリーダーが必要だというわけですけれど、これからはむしろ多様化する、他を受け入れる、違いを認め、容認できるような、そういった人材が求められているのではないかと。それにはわたしたち１人１人が常に意識して行動しなければならない。わたし自身、言い聞かせているということでございます。

江刺　どうもありがとうございます。多様性を尊重するリーダーをわたしたちが選ばなければいけない。トランプ型じゃない人を、そういうことですね。

フロアからの意見と質疑

ここで、会場の皆さまから、お２人のお話、３人でのトークも含めまして、ご質問、ご意見をいただこうと思います。ご質問なり、ご意見なり、お名前をおっしゃっていただきましてお願いします。どうぞお手を挙げてください。

――　今、コロナの時代にあって、看護師さんは非常に働いていらっしゃるにも関わらず賃金が低いというお話でしたけれど、お医者さんと看護師さん、賃金のちがいというのは、責任のあり方、所在のあり方が全然違うのではないでしょうか。

室谷　確かに仕事が違いますからね。医師は責任をもって患者さんを診るという責任があります。ただですね、医師の専門性に対しての価値と看護師さんの専門性に対する価値と、ここの所の考え方を一緒にしてくれればということです。同じにしろと言っているのではなくて、今の状況は医師の指示に基づいて看護師が検査をやる、というふうに医師が一番上というふうな制度になっております。ただ、仕事というのはそれぞれの専門家が、それぞれの専門の仕事をするので、院長の責任はありますけれど、患者に対しては同じような責任を持っています。それなのになぜそれだけ大きな違いがあるかを考えなければならないということで。それぞれの専門家として評価をしてほしいということでございます。

――　アメリカは日本の制度と全然違って、看護師さんはもっとお医者さんに近いような責任のある仕事を任されています。そういうふうに日本の制度もこの先考えなおしていったらどうなんでしょう。

室谷　おっしゃるとおりです。日本の社会的なシステムが、医師と看護師の位置づけが、それぞれ独立した専門としないで、医師のほうを上の位置において、看護師は従うものと位置づけていることが問題なのであって、アメリカは専門の価値をほぼ同じくしているということだと思います。わたしはそうでなければと思っておりますが、日本でなぜ価値が違うかと言えば、やっぱり看護師は女性集団だから、介護に携わるのも女性が多いから。要するに家庭の延長線のような見方しかしてこなかったという。そういう結果ではないかと思っています。そういうことを変えていかなければならないということで。アメリカのほかの国でも専門として看護をすごく、高い位置づけをしている国があります。

――　違う角度からの質問です。わたしは神奈川の女性史については、まだ疎くて、これから勉強しなければいけないなあと思っておりますけれども、お２人とも神奈川で生活をし、仕事、活動をなさってきて、しかもお２人とも、全国的な視野でものを見ていらっしゃるなというような印象を受けたものですから伺うんですけれど、神奈川の女性、あるいは神奈川の女性史、というのをどのように特徴づけることができるのかなあと思いまして、お話ししていただければと思います。

嶋田　とても難しい質問をいただいて、どこからお答えしてよいかわからないのですけれど、神奈川って、武蔵の国と相模の国の２つの個性があると思うんですね。わたしたち物事を県単位で考えがちなんですが、どうも人間の一番底のところはむしろその前の江戸期の何々の国というそこの個性のほうが強いという気がします。それを打破したのが開港場となった横浜ですね。小さな村から大きな都市になった。これがあったんで、武蔵と相模がうまく繋がったんじゃないか、と思っています。横浜というのはやっぱりさっき江刺さんが言われた３日住めば…というふうに、ある意味では非常に開放的な町ですね。

ひょんなことを思い出しました。だいぶ昔旭区で市会議員だった方がおっしゃったんです。その方は広島かな岡山かのご出身で、もしそこにいたら自分は市会議員にはならなかった、なれなかった、なろうとも思わなかった。ふるさとにいたら、あれは何とかさんの娘だ、何とかさんの奥さんだって言われる。ところが、突然に都会化したこの町では、そういうことは誰も言わない。だからわたしは市会議員になれた。わたくしは神奈川全体が見えているわけではないのですが、どうもそういう開いた町の明かりが神奈川県全体にさしているのかなあと、そんな気がします。

室谷　わたしは仕事をするために神奈川県庁に入った時から横浜に住んでいますが、ふるさとは別にあるわけです。横浜という所は、先ほどから言われておりますように外国に開港した町ということで、田舎から出てきた者にとっては、すごくハイカラな町という印象でした。史の会で神奈川の歴史的な人材を掘り起こしていらっしゃいますが、その当時の神奈川だからこれだけ女性の先駆者がいたのだということを改めて意識させられました。この雰囲気が、われわれが育った田舎のほうとは違う、女性にも活動の場を広げてい

くという、そういう雰囲気なんですね。ですからここで、神奈川の女性史を研究されている活動は大変大事なもので、是非これからも続けていっていただきたいなあと思っております。

江刺　では、わたしは女性史の立場からお話します。わたしは神奈川に来て４８年、横浜に来て３５年なんですけれど、神奈川といっても広くて川崎から横浜、湘南地方にかけての湾岸地帯と、相模原とか厚木などの県央とは歴史的に見ると随分違いがあります。横浜はわたしもそうですが外から来た人が作りあげた町ですね。湾岸といっても小田原は城下町で元武士だった方がいらっしゃいますから、横浜から行くとちょっと違う感じがします。それから県央というと戦前は農村地帯ですが、厚木市の奥のほうは、自由民権運動がすごく盛んだったんですね。だから、神奈川の歴史を掘るとすごく面白い。女性も社会的にいろんな活動をした方がたくさんいらっしゃる。それは神奈川の大きな特徴かなあと思います。

わたしたちがつくった『時代を拓いた女たち』は、物故者ばかりで３５４人取りあげていますが、東京は２３区に市部を加えると多すぎるし、同じようなのができるのは大阪かなあと思ったりします。

――　今日は「神奈川の女性の明日を拓く」というタイトルのシンポジウムで、変化する社会にどう向き合っていけばいいかとあります。このまま神奈川の若い女性、中高年も含めてこれからどうなっていきそうですか。先ほど、看護師さんたちの地位向上などを訴えてはという話もありましたけれど、もう少しこういうふうにということがありましたら、メッセージを。

江刺　わたしたちの研究会もそうですし、市民活動をしていらっしゃる方たちも高齢化しているのは否めないと思うんですね。それは女性の場合、以前は専業主婦の方が多かったけれど、今はフルタイムなり、非常勤なりで仕事をしていらっしゃる方が多くなったということもあるかと思いますが、わたしたちがやってきた活動が、今の若い世代の方に引き継がれているかというと大変心もとない面があります。じゃあそれはどうすればいいかということで、ご意見をお願いします。

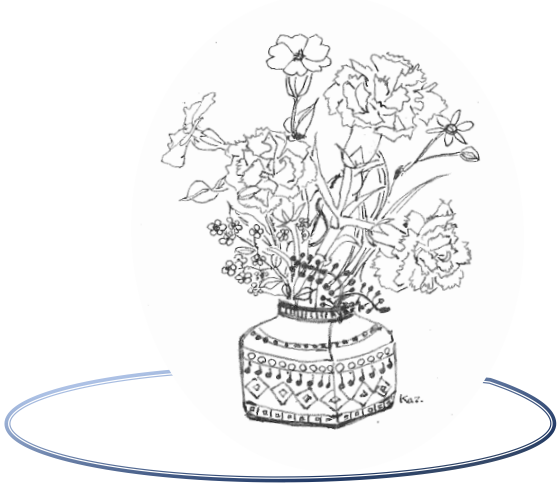
室谷　大変難しい問題で、どうしたらよいかと言われてもなかなかすぐには見つかりません。ただ本当に生活が変わってきております。皆さんの周りもそうですけれど、働き方がテレワークしている方も半分位になったのではないですか。大学もリモート授業とかいって、なかなか外で会えないとか、そんなふうな状況で、相当生活が変わってきている。自粛で１０時以降はお酒を飲む場がなくなり、男性も早く家に帰る、これが続くと生活は本当に変わってくると思います。家庭に早く帰って家族と今までよりも接触する時間が多くなるのはいいことなんだけれど、悪い問題も出てきております。

新しい産業が出始めてきております。大きなレストランでもテイクアウトするという形に食べるものも変わってきております。どこがどう変わってくるかというのは、もう少し様子を見ないと分かりませんけれど、新しい職業が出てくる一方、無くなる職業もあるということになると、いったいどういう生活が、われわれが求めているいい生活なのかとい

うことを、本当に考えなくちゃならないと思いますね。この自粛生活のなかで高齢者の人たちは、コミニユケーションをつくる場がなくなって、一人ぼっちになっている。外に出ないと、人との関わりがなくなるだけじゃなくて、体力的にも衰えてくる。これは本当に大きな問題だと思っております。若い人も１人１人がしっかりと考える時期だと思っております。

嶋田　最後にとっても難しい質問をまたいただいちゃって、どこからお答えしようかしらと、思ったんですが、ガイドというのは対面が一番だと思います。この時代にイヤホンガイド（インカム）というのをうちは導入しました。ただどうでしょう皆さん、今日わたしたち３人マスクを外して皆さんにお話ししました。これが、マスクをしてお話をすると伝える力、つまり言葉が持っている伝える力、人が心のなかから伝えたいという思い、どこまで伝わります？わたくしは早く皆がマスクをはずして、人工的なものではなくて、本当に目と目を合わせて相手の態度がわかるようなそんな距離でお話できる時代をもたらすように、今は我慢する以外にないんじゃないかしら。言葉が持っている伝える力、これをわたしたちは今の間に磨いていく、そういう我慢の時間かなあと思いました。

江刺　先ほどのご質問で若い人にどういう形でお伝えていくかということなんですが、わたしは嶋田さんが、今日お話になっていた市民活動のなかにヒントがあるのかなと思います。男女半々にするとか、有償ボランティアを取り入れるとか、拠点をちゃんとつくるとか。男女半々でなくても、とにかく女性だけ、政治の場みたいに男性だけっていうのではなくて、若い人たちも男の子もおいでよという感じで、一緒にやっていくのが１つの方法かなあと思っております。



第２部　グループの活動報告

かまくら女性史の会　p. ２１
グループ江藍　p. ２２
さがみ女性史研究会「さねさし」　p. ２３
女性史に学ぶ会　p. ２３
六会文学サークル　p. ２４
萌黄の会　p. ２５
山口美代子聞き書きの会　p. ２６
かながわ女性史研究会　p. ２７
史の会　p. ２７

かまくら女性史の会・横松 佐智子

地域女性史の出版ブームがすでに終わりに近づいた２００１年に、市民と鎌倉市人権・男女共同参画課が協働して女性史編さん事業がスタートしました。それから１０年の間に、聞き書き集２冊、年表と通史を各１冊からなる『かまくらの女性史』を出版し、２０１２年に行政との協働事業は終了しました。編さんに携わった編さん員から１５人が残り、以来市民の女性史研究グループ「かまくら女性史の会」として、現在まで活動を続けています。活動内容はレジュメに記載しましたが、補足したいと思います。

これまでの活動を通じて、鎌倉における近現代の女性史を掘り起して市民に発信し、鎌倉の女性史という概念、言葉を市民に定着することができたと自負しています。また、もの申す会としても、直面した些細な問題にも粘り強く交渉して環境を前向きに是正してきました。残念ながら挫折や妥協もありましたが。市の出版物一般は、いずれも市庁舎にある資料行政センターのみで販売しておりますが、出版した『かまくらの女性史』は、担当課を説得して町の本屋さんの棚に並べて販売されています。市民の皆さんが女性史の本に身近に接してもらうためです。同様の目的で市内４か所の福祉センターで、出版した聞き書き集の朗読を続けています。朗読会に参加した高齢者との交流から新たな女性史の掘り起こしにつながっています。

パヴロバ姉妹の遺品約６００点が、寄贈された鎌倉市から流失する緊急事態が起き、市長や議会に抗議文を提出しました。一方マスコミに働きかけて新聞にこの問題が報道されました。市は地元保管を決め、保存状態も改善しました。鎌倉に留められたパヴロバ文書資料を２年余りかけてデジタル化を終えることができました。資料のロシア語について、専門の大学の先生にご相談しましたが、古いロシア語の解読はハードルが高く、資料をどう生かせるかが今後の大きな課題です。

近現代史資料の保存と公開のための文書館は鎌倉になく、先人たちが設立運動を繰り返してきましたが実現していません。『かまくらの女性史』の編さん資料は中央図書館に置き場を提供してくれましたが、私たちも設立の運動を市内他団体と連携して進めてきました。その結果、中央図書館内に資料保存のみの近代史資料倉庫（仮称）はできましたが、提出した文書館設立の陳情は継続審議となり、市庁舎建て替え問題ともからみ進展はありません。このことも粘り強く取り組まなければならない課題です。毎月のニューズレターは発行を重ねています。地域女性史とは何かを問い続けながら試行錯誤、地域に生きた女性たちの姿に視点を当てて掘り起しながら、十分ではありませんがファンタスティックライブラリーを発表の場にしています。

シンポジウム「神奈川の女性の明日を拓く」では無償有償のボランティアの話、行政との関わり方の話題があり興味深く拝聴しました。先に記しましたが、女性史編さんは行政と協働でした。当初編さん員は３０数名、最後は２０名になりましたが、有償になるのでしょうか、毎年３０００円が年度末に各自の口座に振り込まれ、編さんのための場所の提供、本の印刷費を行政が出費してくれました。担当課は編さん内容に一方的な要求やＮＧを出すこともなく、対等な関係を１０年間続けられました。市民編さん員の熱意と行動力、

費やした時間の大きさに対し安価な報酬のアンバランスに口を挟めなかったのかもしれませんが、何より鎌倉の女性史を作りたいという共通の強い目的と理解が合致して、信頼関係を維持できたと思います。協働作業が終了した同じ頃、総務省の男女共同参画に対する取り組みの後退も反映してか、市役所に男女共同参画課がなくなり、担当職員も異動し言葉がつながらなくなりました。「市民と協働」という言葉は最近たびたび市長や市職員から発せられますが、市民の力を行政が都合よく使うことが「市民と協働」というご都合主義が明らかで、焦りと寂しさを感じています。

グループ江藍・中内 むつ

グループ江藍は、かながわ女性センターを拠点に長年活動を続けてきた女性史サークルです。開館当初の「かながわ女性アカデミー講座」を受講した者が中心になってできたグループです。すでに３７、８年たっております。当初はセンターの事業でもある神奈川の女性史編纂に協力しました。また、１９９８年に第７回全国女性史研究交流のつどいが江の島で行われた時に、江刺先生が事務局長をつとめられたのですが、わたしたちは史の会と一緒に事務局員として活動しました。２０００年代に入りましてからは、テキスト学習を中心とした自主的な学習サークルとして、活動を続けてきたわけですが、気が付くと会員の高齢化が進んでいまして、もう８０代後半が３名というような状況で、このまま何も記録を残さないで、会が終わってしまうのは残念だねということになりまして、活動の記録を冊子として残そうという話がでてまいりました。

２０１６年ころからぼちぼちと作業を進めてきたのですが、当時は史の会の研究誌５号をテキストにして学習をしていたのですが、なかなか冊子作りのほうは進みません。女性センターを活動の拠点としてはおりましたが、２０１５年に閉館となったあとは藤沢市の辻堂にあります明治公民館を借りて、続けていたんですね。困ったなあと思っていたら、その貸室がコロナ禍で休みになっていよいよ完成が危ぶまれる事態になったわけです。会員も多い時は２０人以上いたのですが、最後まで残りましたのは、７人になったんです。しかも１人は介護施設に入ることになって、いよいよ待ったなしの状況になってまいりました。こうしてはいられないということで、９月頃から、冊子作りを再開しまして、それからはラストスパートがかかりまして、とにかくシンポジウムまでには完成させようと頑張りました。まさにおととい、１２月１４日に印刷所から届いたばかりの出来立てほやほやの冊子でございます。

わたしどもの３７年に及ぶ活動の記録、年表、どのようなテキストを学習したかを詳しく書きまして、そのほかに最後まで残りました７人が、グループ江藍にたいしてどんな思いを抱いているかということを各自がそれぞれの視点で飾らない筆致で書いております。いろんな思いが伝わってくる文章がありまして、なかでも女性ンターという、あんなにいい活動拠点があったのに三十数年で廃館になってしまうなんてという、ちょっと恨みを書いている人もいます。ささやかな冊子なんですが、わたしどもの活動の記録として、お手にとってお読みいただければ幸いです。

さがみ女性史研究会「さねさし」・神谷 智子

「さねさし」は今年で発会二十周年を迎えました。１９９９年に１０人で発会し、会員は現在４人です。２０２０年１０月１５日、４冊目『あつぎの女性―愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き』を刊行しました。

２００１年２月、神奈川県の男女青年団の機関誌『武相の若草』の創刊号から８８号までが、当時の津久井郡の郷土資料館に保管されていることを知って、初代内山代表が８８冊を借りて約５０００枚をコピーしました。

『武相の若草』は１６７号までありますが、残りは横浜開港資料館や横浜市立中央図書館などでコピーしました。貴重な資料で、会員の間ではこれを何とかまとめる必要を感じていました。そののち愛甲郡男女連合青年団機関誌『愛青』や各町村の機関誌などが見つかりました。そこに投稿している女子青年団の活動を知り今回まとめました。巻末に女子青年団の活動年表を付けており、活動年表を作ることから始め、それにより全体が見えてきて、より深く女子青年団の活動を知ることができたように思います。聞き書きは機関誌に投稿した人のご子孫からもお伺いすることができました。

『あつぎの女性』は情報や資料などご協力いただいた皆様の力が結集してできあがったと思います。女子青年団の女性たちがずっとわたしたち４人の背中を押してくれているように感じていました。

江刺先生には２０年間お世話になりました。ご指導いただきありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

女性史に学ぶ会・星賀 典子

わたしたち「女性史に学ぶ会」は、直接女性史を研究している会ではありません。女性会員４人はそれぞれ、平和・教育・環境・女性などの問題に地域で長年取り組んできています。その経験から、市民が個を大切に、自分らしく暮らせる社会を実現するには、根源の力となる自己尊重意識、人権・男女平等・平和意識を持ち、深め強めることが大切だという考えで一致しました。そのための学びを女性史に求め、２０１６年から平塚市で江刺昭子氏の講演会を開いています。会の詳しい成り立ちと講演会の内容は、お手元の資料でご覧ください。

平塚の女性たちの歩みとして、ここでは戦後の女性主体の住民運動をご紹介します。戦前、海軍の火薬廠に関連した軍需工業で拡張した平塚の町は、１９４５年７月、米軍の大規模爆撃を受けました。敗戦後、商工業で再興していきますが、復興資金の捻出に競輪場が開かれます。女性主体の住民運動は、ＧＨＱへの海水プール返還要求に始まり、市立女子高校の県立移管反対、平塚競輪反対、県警察官舎建設反対などが起こっています。

ここからは当会会員たちも参加した住民運動の話です。

１９７９年、地元業者が日本競馬会の場外馬券売り場の建設計画を市に申し出ました。最初に反対の声を上げた堀井忍は一時期住んだ相模原で社会教育を学んでいました。当会会員の長坂紀子らが賛同の輪をひろげ、一万筆からの反対署名を集め、議会に請願を出し

ました。続いてほかの団体も反対運動を繰り広げるうち業者が突然申し出を取り下げました。

事態終息後、堀井は運動を共にした有志と「平塚母親の会」（現、ひろばの会）を組織します。発会式では、相模原の社会教育の基盤を築いた宮下操さんが基調講演をされています。平塚母親の会は、月１回の学習会と会報誌発行を続けました。代表を長坂が引き継ぎ、やがて市議会に自分たちの仲間を送ろうと動き出します。選挙のやり方は「茅ヶ崎の未来を考える会」に教わりました。同会ではすでに市川房枝記念会に学び、理想選挙で西山正子さんを当選させていました。当会会員の村中恵子も担った一人です。

平塚では大蔵律子が推薦され、１９８７年、市議に当選。４期１６年経た２００３年、市長選に挑みました。後援会の代表は長坂です。私は広報のサブで、長坂から女性政策の公約を一つと問われ、それなら女性専門の相談窓口をぜひとお願いしました。市長就任後、窓口が開設されています。この市長選の事務所でのやりとりから、平和を語り継ぐグループも生まれています。もう一人の当会女性会員藤元美智子はこれを見て、自分独自の活動を始めています。

わたしたち女性史の会のことに戻り、課題と、女性史に取り組む方がたへのお願いを最後にいたします。今年１０月の講演会のテーマは、「明治１５０年、女性差別は続く―男性優位の社会通念を変えるには」でした。参加者は、江刺氏から示された「女大学」の戒めに思い当たることが多くあり、唖然としましたが、打開策を話し合っていきたいという要望も出されました。では手始めにと、連続講座を思いつきました。「女大学」のそれに逐一反論した福沢諭吉の「新女大学」を学んでから、自分で「新新女大学」を書いてみる。そしてそれぞれを読み合わせて、みんなの「新新女大学」をまとめ上げるというような講座です。

でも残念ながら、わたしたちには学習会を定期的に運営する余裕も、学びを支える力もありません。女性史に取り組む皆さま、どこかで実現させてくださいませんか。

それから地域で女性史にとり組む方がたへのお願いです。皆さまの女性史と神奈川の女性史とを組み合わせて、高校生向けの地域色豊かな人権啓発書をつくってくださいませんか。

六会文学サークル・石井 信子

１９８７年に藤沢の北部に位置します藤沢市六会公民館で、江刺先生の講座を５回開きまして、その後有志たちが立ちあげて六会文学サークルという名前を付けました。そこから拠点をもう少し北にあります湘南台図書館に移しまして今年で３３年過ぎて、３４年目になります。

わたしたちの活動は、読書を中心として行い、女性史研究会ではなく、ほかのグループとは少しちがった会になっております。課題図書を決めまして、毎月第１木曜日１０時から１２時まで、湘南台図書館で、現在は１１名ほどで活動しております。東京、厚木、鎌倉、藤沢と多方面から来ています。今までの在籍者は８１名になるんですが、初めのころ

には男の方もおられたとお聞きしています。先生が１時間ほど、作家さん、課題図書についての丁寧なレジュメに沿ってお話をしてくださり、内容がわからない時の本でも、自分たちは納得して、とても自分では今までなかつた体験とか勉強をさせていただいております。そのあと皆で、１時間ほど感想を述べて、自分とは違った意見を楽しみとしながら、こういう考えをもって読まれているんだなあと、とても参考になります。

１年に１度、その年に読んだ本にちなんだ地を文学散歩します。最初のころから２３年くらいは県内とせいぜい東京までだったんですけれど、１０年ほど前からは遠出をして、１泊、あるいは２泊の旅行が９年間続いております。今年はコロナ禍でしたが、栃木県まで日帰りで強行軍でした。文学散歩は１１月に行くのですが、９月頃からその土地にちなんだ本を読んでから行きます。また先生からホテルなどで講義していただきますので、実りの多い散歩になっています。

会は３３年間続いているのですが、５年ごとの節目の年に講演会を開きまして、今まで在籍した方も出席していただき、交流の場を持てたりしております。３３年間、先生は毎月通って下さいまして、一度も休まず、先生だけが欠席されていない状況です。今後も体が続く限り続けてくださるとおっしゃっていますので、わたしたちはついて行くだけですけれど、今後とも、ご指導をよろしくお願いいたします。２０１７年には３０年誌を刊行しました。皆で読んだ３００冊のなかから９０冊を選んで、先生のレジュメの説明と会員たちの感想を書いた本になっております。お役にたてると思います。

萌黄（もえぎ）の会・東（ひがし）　順子（じゅんこ）

現在の会員は５名です。１９９１年、「揺れ動く社会と女性」というテーマに集まった女性１５人で発足しました。高齢と病気その他の理由で現在は５名です。定例会は毎月第２木曜日、横浜の県民サポートセンターで午前中に行っております。

メンバーにはもう亡くなられた西亀（にしき）さんという大正生まれのとても女性史に詳しい方がいらっしゃいまして、その方が指導的立場でわたしたちを指導してくださいました。例えば史の会の第１号に出ております娼婦の話になりますと、西亀さんは慰安婦問題とか、ＲＡＡの問題にまで内容を深めてくださいました。わたしたちは有意義な時間を過ごしたと思います。

一時期、韓国籍の方が参加しておられて、その方は戦前の日本の統治政策に詳しい方でした。創氏改名をどのようにしたかということも話してくださいました。日本名もお持ちでした。

活動内容は配布資料に書いておりますように、『史の会研究誌』第１号から第６号と『時代を拓いた女たち』第Ⅰ集から第Ⅲ集をテキストにしています。先人たちが重ねてきた血のにじむような努力を無にしないために私たちはどのように歩めばいいのかがテーマです。

女性の人権、子供の貧困、選択的夫婦別姓、基地問題、温暖化対策、遺伝子組み換え等々、まさに揺れ動く社会のなかで起きているさまざまの事象を取り上げています。

移民政策を知るためにＪＩＣＡを見学したり、鶴見線に乗って車窓から安善町を確かめたり、沖縄に戦跡を訪ねたりと外に出ることもあります。

活動は消極的ですが、この３０年間には、何気ない会話を通して、友人、知人、夫、子供、孫に意識の変革をもたらしたのではないかと自負しています。

山口美代子聞き書きの会・枝松（えだまつ）　栄（さかえ）

この会は、江刺さんの提案で東横線沿線に住んでいる４人の友人が、大倉山の山口美代子さんのマンションに集まって聞き取りを始めました。おととしの３月でした。それから去年の３月まで５回聞き取りをしました。山口さんは好奇心旺盛でユーモアに富んだ人なので、話があちこち飛びまして、後でまとめるのに苦労しました。その後、昨年の９月に体調を崩され急に亡くなられました。９０歳でした。

没後、せっかく聞き取りをしたので１冊にまとめようと編集作業を始めたところ、新型コロナ問題が起こりましたが、７月、８月くらいから再開しました。編集経験のある仲間が今日の会に間に合わせようと努力して、実は昨日できあがりました『ｍ・ｙの軌跡』（山口美代子聞き書きの会編）がそこに置いてあります。ｍ・ｙは山口美代子さんのイニシャルで、“資料と女性”ひとすじに生きた彼女の軌跡が残されています。この表紙と扉のデザインは、親しくされていた従兄の綿貫宏介さん作です。

山口さんは横浜で小学校を卒業後、１９４１年裁判官だった父とともに一家はソウルに移住、その後北朝鮮元山での女学校生活、敗戦による引き揚げ、父親の任地である北海道で図書館人として出発、その後１９５７年国会図書館へ入館しました。３３年余在職した国会図書館では、いくつもの貴重な仕事を果たしました。１つは女性史の年表として画期的な『日本婦人問題資料集成』第１０巻「近代日本婦人問題年表」を６年がかりで完成させました（ドメス出版、１９８０年）。この作業にあたった女性職員７人を率いたのは義姉丸岡秀子と共同編者の山口さんでした。

１９７８年には、政治家の証言を録音テープに収め後世に伝える「政治談話録音」で女性政治家では唯一登場した市川房枝参議院議員に対する質問者の１人となりました。９０年には「議会開設百年記念議会政治展特別展示・女性と政治－平等へのあゆみ」を任され、明治初年から今日までの女性の政治参加をまとめて成功させました。

９１年図書館退職後も、横浜をはじめとする各地の資料館や女性センターの蔵書構成や目録作りに携わりながら、市川房枝記念会女性と政治センターで婦人参政関係および参議院議員時代をふくむ膨大な史資料の整備に専念しました。２０年以上にわたるライフワークとして続け現役のまま他界されました。

わたしは国会図書館に入館後山口さんと知り合い、約５０年間公私ともに親しくしてきました。８９年たまたま彼女と同じ建物に空き部屋がみつかり大倉山に引っ越し、退職後は市川房枝記念会にも一緒に通いました。今回聞き書きの会で彼女の業績と、人となりを改めて知る機会を得て嬉しく思っています。

かながわ女性史研究会・小野塚 和江

かながわ女性史研究会は、２０１６年に『時代を拓いた女たち』の第Ⅲ集を作成することを目的に誕生いたしました。Ⅰ、Ⅱ集を出版された「史の会」会員４人の方と新たなメンバー５人が加わって９人で発会し、３年後の２０１９年に第Ⅲ集を完成させることができました。

『時代を拓いた女たち』は神奈川にゆかりのある、すでに亡くなってしまった方々のミニ評伝です。見開き２ページで綴っています。資料を基にして、執筆するのが基本ですから、文字資料はもちろんご遺族の方、関係者、関係団体に取材するなど丁寧に資料収集をいたしました。私も謎解きのように資料集めにいろいろなところに行き、沢山の方にお会いしてお世話になりました。そんなことが今思いだされます。

原稿は月１回の例会で、お互いの原稿を意見を出し合って、そして作りあげていきました。経験が浅い私は先輩方のアドバイスをいただきながら出版まで漕ぎ着けることができました。その時の感動は忘れられません。出来上がった本は、女性が生きてきた歴史、証として後世に残って役に立つんだなあと思うとすごく嬉しいです。みなさんも長く女性史の活動を続けていらっしゃるのはそのような喜びがあるからじゃないかなと思います。

今はかながわ女性史としての例会などは開いていないのですが、会員のほとんどがほかの団体に所属し、それぞれの団体で活動をしています。それらをつないでくれているのが、「かながわ女性史研究会ＨＰ」です。会員の星賀さんがつくってくださって、会員のそれぞれの活動や会の今までの活動の報告とか今後の予定とかを載せてくださっています。ホームページは「美しく読みやすく情報豊富」ですので、ぜひみなさんも読んでいただければと思います。また、会員それぞれが関係する団体やＮＰＯ法人ＷＡＮのホームページにもリンクしているので、そちらの情報も得られます。

室谷さんのお話のなかで、『時代を拓いた女たち』の第Ⅲ集に私が書かせていただいた森秀子さん・小林フミ子さんという議員さんが、国際女性年の時にすごく活躍されたというお話があったので、懐かしく思い出しました。

今日は私が学んできたことを人に伝えることが大事だと思いました。私たちはこうして集まり、情報交換し、手を繋いでいくことが大切だと思いました。

史の会・三須 宏子

史の会の成り立ちにつきましては先程からいろいろお話が出ていると思います。

史の会は研究誌の発行と『時代を拓いた女たち』の刊行が主な仕事だったんですが、見える化してみようと思って年表をつくりました。３２年って長いと思ったのですが、ほかにもっと長いグループがいらっしゃいますね。特別でもないようですけれど、３２年の年表をみますと、史の会は研究誌の発行とか『時代を拓いた女たち』の発行とかのたびにシンポジウムを開いてきました。シンポジウムとまでいかなくても、それに類するものとして、お話の会だの、お茶の会だのを開いて、その度に今日お集まりいただいた県内の女性史関連グループ皆さんにお声を掛けて、ご参加いただいたなあと思います。

江刺昭子さんが女性に関わる本を発行なさった時なども、記念会やお話の会を催された時、史の会としてお手伝いしてきました。その時もいつも、皆さまをお誘いして、ご参加いただき、ご協力もいただいてきました。もしかして今日来てくださっている方のなかに、この全部に参加してくださっていた方がいらっしゃるかもしれません。

いつも皆さんにご協力いただいて、ここまで来ました。お手元の「号外『史の会通信』シンポジウムと交流会記念号」の年表を見ていただくと、これに参加したなというのがあるかもしれません。ご支援とご協力に感謝申し上げます。

本日は新型コロナの警戒下のため、連絡先の確認や検温などさせていただくことになり、ご参加のグループの方にお手伝いをお願いいたしました。皆さま、ご協力ありがとうございました。

シンポジウム当日に配布した資料を、

次ページ以降に掲載します。

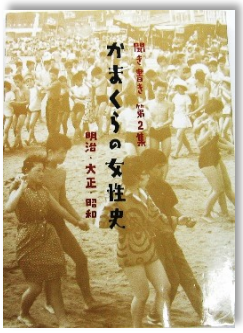
かまくら女性史の会	p. ２９
グループ江藍	p. ３１
さがみ女性史研究会「さねさし」	p. ３３
女性史に学ぶ会	p. ３５
六会文学サークル	p. ３６
萌黄の会	p. ３７
山口美代子聞き書きの会	p. ３８
かながわ女性史研究会	p. ３９
史の会	p. ４０

かまくら女性史の会　活動報告

かまくら女性史の会は、鎌倉市人権・男女共同参画課と協働して 2001 年から開始された女性史編さん事業を担い、『かまくらの女性史 全 4 冊』出版終了後の 2013 年に、市役所との協働から離れ、有志が自主的に作った会です。

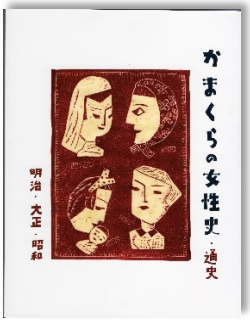
私達にとっては 4 冊の本を出版した後も、聞き書き・年表、通史の追加補充の掘り起しや検証が必要でした。また、市民への周知のための模索、収集した資料と近現代の歴史資料を保存閲覧できる文書館設立運動を市内他団体と連携して取り組んできました。

聞き書き集
33 人が語る大正・昭和



聞き書き第 2 集
明治・大正・昭和

明治・大正・昭和
かまくらの女性史 年表



明治・大正・昭和
かまくらの女性史 通史

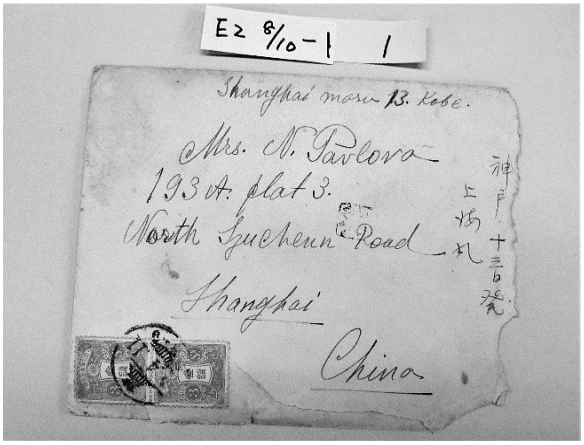
【活動内容】

1） 鎌倉市内の女性の歴史をさらに掘り起す。

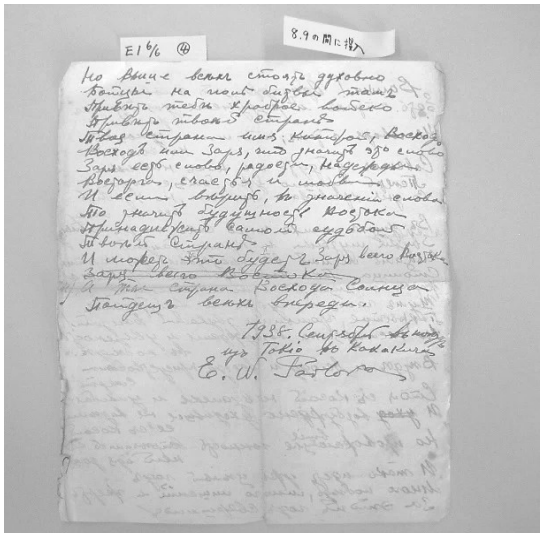
偏りなく全市に目配りして、掘り起し問い直す作業を継続している。

2） パヴロバ姉妹の鎌倉市に寄贈された文書遺品の保存と整理検証

遺品の市内保存と保存環境の改善を市側に申し入れを行い、文書資料のデジタル化を実施した。新たな事実の検証もあり、パヴロバ姉妹についての展示、講演などを行ってきた。



パヴロバ資料　1938 年の手紙



1） ニューズレターの発行

A4 サイズ 1 枚両面のミニコミ版を毎月発行（現在 78 号）してきた。
内容は会の活動報告の他、会員各自の職業やボランティア活動及び文化活動を通じての記事を分担、交代で執筆する。最近のシリーズ：私たちの「戦争体験」は読者の反響が大きい。ニューズレターの話題は例会での意見交換を盛り上げている。

2） ファンタスティック☆ライブラリー実行委員会

市内図書館（中央と地域館）計 5 館と市民団体が実行委員会を作り、毎年各団体と共同開催している企画で、今年度は 13 回目となる。当会は鎌倉の女性史についてその年の成果を発表し、図書館との協働企画「クラシックの午後」では女性史の朗読を実施している。

3） 『かまくらの女性史聞き書き集』の朗読会

市内各所の福祉センターと協働して、毎年実施している。鎌倉の女性たちの聞き書きの朗読を通じて高齢者と交流し、時には新たな女性史の話題を聞くこともできる。

4） 近現代史資料保存のための文書館設立運動

市内他団体と連携して、講演会、シンポジウムや見学会を開催し、文書館の必要を訴えてきた。鎌倉市議会に陳情書を提出したが、継続審議となり、未だ進展はない。

以上

2020 年 11 月 25 日　　かまくら女性史の会　　横松佐智子

グループ江藍

1982年11月、女性の自立と社会参加を促進するための施設として、神奈川県立婦人総合センター（のち、県立かながわ女性センター）がオープンした。その記念行事の1つとして「第1回かながわ女性アカデミー講座」（全10回）が開催され、この講座の受講生たちで結成されたサークルが「グループ江藍」である。講座は第4回まで続き、当初、7人だった会員も20余人に増えた。会のネーミングは、江の島の「江」と海の「藍」、出会いの「あい」を藍にこめての、金森トシエ館長の命名である。

発足当初から、神奈川の女性史を作成するためのグループだったので、まずは、基礎学習に取り組んだ。同時に県内各地での聞き書きにも取り組み、さまざまな人と出会い、その生きざまに感動したものである。また、県民参加のワーキンググループ発足後は、新聞の女性関連記事のカード化や聞き書き取材などの作業にあたった。

1987年、『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち』、1992年に『共生への航路―かながわの女たち'45～'90』が刊行されてからは、自主グループとして新たなスタートを切る。特に指導者はおかず、代表や会計などの役割は毎年交替で全員が関わる。学習の中心となるテキストの選択も、候補を挙げて話し合いで決めた。

テキストの学習が中心ではあったが、関連する施設や地域の見学・学習にもよく出かけた。澤田美喜記念館、金沢文庫、婦選会館や弥生美術館の見学、神楽坂などを散策した。

1998年の「第7回全国女性史研究交流のつどいinかながわ」（以後「つどい」とする）には、全員が実行委員会に参加し、事務局員として活動する。また、全国で行なわれた「つどい」には積極的に参加。第3回の松山の「つどい」、奈良、岐阜、新潟、東京、岩手などで行われた「つどい」にも希望者がそれぞれに参加して学習を深め、各地方の観光をも楽しんだ。

戦中・戦後の厳しい生活を体験した会員の多くにとっては、近年の社会情勢、教育問題、憲法改定問題などの動向を黙って見過ごすことはできない。過去の歴史を振り返り、過去に学び、将来を見据えようと襟を正す。以前にも、『歴史評論』4月号特集「戦争参加と女性」に取り組んだが、近年では、樋口陽一『いま憲法は「時代遅れ」か』（平凡社）や矢部宏治『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』（集英社インターナショナル）などに挑戦。個人では読みにくい書籍も、みんなで協力し、資料を集めながら読み解き、時代の状況を把握する努力を続けている。『史の会研究誌―「武相の若草」を読む』第5号も、戦前の女子青年団の動向から、女性たちの戦争への関わりがわかり興味深い。

数年前から、グループ江藍の記録をまとめ、冊子を作ろうとの声が出ていたが、会員それぞれがさまざまな活動もしており、高齢化もあり、なかなか難しかった。ささやかな活動記録ではあるが、いま、ようやくまとめることができた。お手に取っていただければ幸いです。

テキスト一覧

学習期間	書名	著者、出版社
1984年9月 1985年3月	神奈川県の百年	高村直助・上山和雄・小風秀雅・大豆生田稔 山川出版社
1985年9月 1988年8月	近代日本婦人教育史 ―体制内婦人団体の形成過程を中心に	千野陽一 ドメス出版
1991年9月 1993年10月	女性史研究入門	歴史科学協議会　編 三省堂
1994年3月 1996年2月	女の戦後史　Ⅰ　昭和20年代	朝日ジャーナル　編 朝日新聞社
1996年3月 1998年2月	女の戦後史　Ⅱ　昭和30年代	朝日ジャーナル　編 朝日新聞社
1998年5月 2001年2月	女の戦後史　Ⅲ　昭和40・50年代	朝日ジャーナル　編 朝日新聞社
2001年10月 2002年6月	女性史と出会う 歴史文化ライブラリー116	総合女性史研究会　編 吉川弘文館
2002年12月 2004年3月	歴史評論　4月号　通巻552号 特集　戦争参加と女性	歴史科学協議会　編 校倉書房
2004年6月 2006年12月	買売春と日本文学	岡野幸江・長谷川啓・渡邊澄子　共編 東京堂出版
2007年4月 2010年2月	佐多稲子と戦後日本	小林裕子・長谷川啓　編 七つ森書館
2010年4月 2011年6月	女たちの模索の時代 山梨県下の政治参画	大森かほる 第一書林
2011年10月 2013年5月	いま、憲法は「時代遅れ」か 〈主権〉と〈人権〉のための弁明	樋口陽一 平凡社
2015年5月 2017年3月	日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか	矢部宏治 集英社インターナショナル
2017年5月 2019年8月	史の会研究誌　第5号 ―『武相の若草』を読む	史の会　編 史の会（江刺昭子）

「つどい」に参加して　2001年9月1日

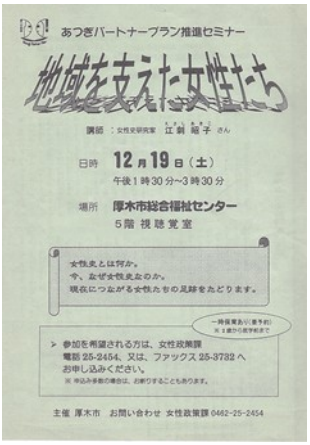
グループコーナーで　　2007年1月25日

さがみ女性史研究会「さねさし」

ー「さねさし」20 年のあゆみー

1998 年 9 月、江の島のかながわ女性センターで「新ミレニアムへの伝言　第 7 回全国女性史研究会交流のつどい in かながわ」が開催されました。厚木からは 6 人参加しました。全員主婦で、厚木で地域活動をしていました。女性の歴史を紐解きたいという意欲のあるメンバーでしたので、この大会に触発され、女性史研究会発会に向けて話し合いを進めました。

12 月には厚木市に働きかけ、女性政策課主催の講演会を開催しました。あつぎパートナープラン推進セミナー「地域を支えた女性たち」です。講師は女性史研究者江刺昭子さん。江刺さんはわたしたちが厚木市へ推薦した講師でした。60 人ほどの参加者でしたが、「女性史とは何か、今なぜ女性史なのか、現在につながる女性たちの足跡をたどります」と投げかけた講演でした。最後に初代代表になった内山良子さんが参加者に呼びかけました。「わたしたちはこれから女性史の会を作りたいと思います。いっしょに会を立ち上げましょう」と。わたしたちを含めて 10 人が手を挙げました。



ー講演会チラシー

1999 年 4 月、さがみ女性史研究会「さねさし」の誕生です。会の名前「さねさし」は、古事記にある「さねさし相武（さがむ）の小野（をの）に燃ゆる火の火中（ほなか）に立ちて問ひし君はも」からつけました。

江刺昭子さんを指導者としてお願いし、会が取り組んだのは聞き書きでした。活動を表現する方法として本を出版するのが自然の流れでした。2004 年『あつぎの女性 20 人』の聞き書き集を刊行。続いて 2009 年厚木は自由民権運動が盛んだった地域ということもあり、その子孫の方々10 人の聞き書きと年表をあわせて『続・あつぎの女性ー民権家子孫の聞き書きと女性史年表ー』を刊行。

2015 年は、7 人の話者から聞き取り、話者に関係した資料をまとめ『続々・

あつぎの女性－聞き書きと資料－』を刊行。今年 10 月、20 周年記念『あつぎの女性－愛甲郡女子青年団のあゆみと聞き書き－』を刊行しました。421 ページの分厚い本で、わたしたちにとっては力の入った作品になりました。

今号は明治・大正・昭和に生きた愛甲郡の女子青年団の活動を膨大な資料から掘り起こし、そのあゆみを追って、令和の今によみがえらせることができました。普通に生きた女たちの名前や活動をできるだけ多く残そうと心がけました。聞き書きは厚木市、愛川町在住の 5 人の女性たちです。父親が機関誌に投稿した人や青年団で活躍した義父など、青年団に関連した聞き書きもあります。20 年の節目を迎え、さらなる一歩をあゆみます。

会報は 2000 年 4 月、創刊号を発行、現在までに 15 号になりますが、「さねさし」の歩みが残る資料となりました。

「全国女性史研究交流のつどい」は、第 8 回岐阜、第 10 回奈良、第 11 回東京、第 12 回岩手などの大会に参加。

2009 年の『続・あつぎの女性－民権家子孫の聞き書きと女性史年表－』は、第 14 回日本自費出版文化賞に入選しました。現在、会員は神谷智子・中村碩子・亀井喜美子・深沢かをるの 4 人です。　　（2020 年 12 月 16 日）

－今までに出版した本－

－10 月、厚木市に寄贈－

女 性 史 に 学 ぶ 会

市民が平和に、個を大切に自分らしく暮らせる社会の実現をめざすための根源の力となる、自己尊重意識や人権・男女平等・平和意識を持ち、深め強めることを目的として、女性史に学ぶ場を平塚市で開いています（2016 年 2 月設立、会員 女 4 人、男 1 人 / 平塚在住 4 人、茅ヶ崎 1 人）。

報告概要

・平塚市の女性たちのあゆみ、ほかの地域の女性たちとのつながり
・当会について
・当会の課題、女性史に取り組む方々へのお願い

当会設立の経緯

平塚市では、2011 年に中央公民館で「ノンフィクション入門―学んでから、書いてみよう 地域人物史・女性史―」講座（講師 江刺昭子氏、東日本大震災が発生したため 1 月から 4 月まで）が開かれるまで、公で女性史が取り上げられることがなかったようです。

講座修了生有志で立ち上げた平塚人物史研究会では、2013 年から江刺氏を講師に、主に県域の近現代女性史などの講演会を開催してきました（2013 年「神奈川の女性と民権」、2014 年「遊廓・紡績工場の女たち」「自分らしく生きるために奮闘した女たち」、2015 年「平塚らいてうと与謝野晶子」、2019 年「地域史を豊かにするために」）。

この平塚での女性史との出会いを通して、保守的な土地柄のまちを変えるには、まず身近な一人ひとりの意識が変わっていくこと、そのための継続した学びに女性史は最適、という考えで一致し、当会を立ち上げました。江刺氏には今に踏み込んだ話をお願いすることにしました。

これまでの講演会（講師はすべて江刺氏）**・学習会**　（参加者数）

・**第 1 回講演会「伝えたい、非戦の思いを」**　2016 年 5 月　（女 26 人 男 7 人）
・**第 2 回講演会「女の政治参加、今のままでいいの？」**　……☞
2018 年 3 月　（女 33 人 男 6 人）
・**基礎学習会「ハラスメントって何？」**　2018 年 11 月　（女 9 人 男 5 人）
厚生労働省委託女性就業支援全国展開事業による講師派遣
・**第 3 回講演会**
「働く女性へのハラスメント　―メディアの場合、明治から現代まで―」
2019 年 3 月　（女 24 人 男 7 人）
・**第 4 回講演会**　平塚市人権・男女共同参画課との共催、かなテラス後援
「明治 150 年、女性差別は続く　―男性優位の社会通念を変えるには―」
2020 年 3 月（新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期）→10 月開催
（女 57 人 男 13 人）

『神奈川新聞』文化面
2018 年 3 月 29 日付

毎回好評の参加者からのお知らせコーナーより、「かながわの女性史」関連

2020 年 10 月 25 日講演会　コロナ禍にもかかわらず、これまでよりはるかに多くのご参加をいただきました。講演後には男性 3 人女性 1 人から質問・意見・当会への要望があり、アンケートに 37 人もの方から回答が寄せられました。テーマへの関心の高さと、直接話を聞くことのできる機会、男女が場を共有することの大切さを改めて感じました。

※女性史に学ぶ会へのお問い合わせは、090-6655-7862 / nonnorike@yellow.plala.or.jp 星賀（ほしが）まで

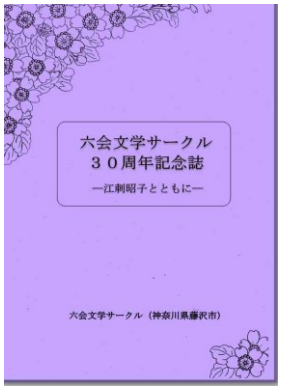
六会文学サークル

１９８７年に藤沢市六会公民館が、講師・江刺昭子氏による全５回の講座「近代日本文学にみる家族像」を開催しました。講座終了後、受講者有志が立ち上げたのが六会文学サークルです。同年４月に講師を江刺氏にお願いし、会員１９人で出発しました。月に１回午前の２時間、藤沢市総合市民図書館会議室を会場に、読書を通じて知識を習得し、会員相互の意見交換により作品への理解を深め、読書の楽しみを共有するという趣旨で活動してきました。今年で創立３３年、延べ会員数は８１人に及び、現在の会員は１１人です。

課題図書は、講師と会員が推薦した図書の中から多数決で選んでいます。明治期から現代までに発表された日本文学で、一般的な小説、歴史（時代）小説、ミステリー、紀行文、エッセイ、ノンフィクションなどさまざまです。各月の課題図書に関して講師がレジュメを作成し、例会の前半で講義をします。レジュメには著者の略年譜や作品の時代背景などの資料が含まれます。講義の後に会員が自由に感想や意見を述べ合います。一つの作品についての異なる感じ方や捉え方を知ることは新しい発見であり、視野を広げるきっかけにもなります。例会ごとに交代で記録係が講師の解説と会員の感想をノートに記します。

秋には文学散歩も実施しています。しばらくは神奈川県内や東京に作品の舞台や作家のゆかりの地を訪ねる日帰りの旅をしましたが、２１年目からは他県にも足を伸ばし、宿泊を伴うようになりました。旅行の前３例会ほど、旅行の目的地にまつわる作品を読み、あらかじめ現地に関して知識を得るようにしています。長崎、金沢広島には３日間の旅をしました。

これまで創立５周年（１９９２年）には山口淑子・藤原作弥『李香蘭―私の半生』についての講演と「蘇州の夜」上映。１０年目（１９９６年）には、講演「山の動く日来る―与謝野晶子の詩と評論」と「母『与謝野晶子』を語る」（晶子の６女森藤子の語り）上映。２０年目（２００６年）には、講演「中里恒子の世界」とビデオテープ「湘南の光と影」と「中里恒子　物語のこころ」（神奈川近代文学館から借用）を上映。３０年目（２０１７年）には、講演「女性作家の時代―明治から現代まで」を開催し、『六会文学サークル３０周年記念誌』を刊行しました。３０年間で読んだ約３００冊の本の中から９０冊を選び、それらのレジュメから著者略歴、記録ノートから講師の解説・会員の感想を要約しまとめたものです。サークルの記録として残すとともに、この冊子を読むことで、また新しい本との出会いが生まれることを願って編集しました。



萌黄の会

代　表　　牧野迪代
会　員　　5名
定例会　　毎月第2木曜日
　　かながわ県民サポートセンター

１９９１年2月に神奈川区社会教育課主催で講演会「揺れ動く社会と女性」が開かれました。
江刺昭子先生を初め諸先生のお話は、教科書的知識しか持たなかった者たちにとって、たいへん学習意欲をそそられる内容でした。
そこで啓発された参加者が立ち上げたのが「萌黄の会」です。

活動内容　　『史の会研究誌』第1号～第6号と『時代を拓いた女たち』第Ⅰ集～第Ⅲ集をテキストにしています。
　　先人たちが重ねてきた血のにじむような努力を無にしないために私たちはどのように歩めばいいのかがテーマです。
　　女性の人権、子供の貧困、選択的夫婦別姓、基地問題、温暖化対策、遺伝子組換え等々、まさに揺れ動く社会の中で起きているさまざまの事象を取り上げています。
　　かつての移民政策を知るためにJICAを見学したり、鶴見線に乗って車窓から安善町を確かめたり、沖縄に戦跡を訪ねたりと外に出ることもあります。

　　10月例会　　石敢當について（江刺先生の記事より）
　　コロナに関連して、アメリカの医療制度について
　　11月7日　　国立歴史民俗博物館「ジェンダーの日本史」展を見学
　　11月例会　　「ジェンダーの日本史」について

以上のように活動は消極的です。しかし、この30年間には、何気ない会話を通して、友人、知人、夫、子供、孫に意識の変革をもたらしてきたのではないかと自負しています。

山口美代子聞き書きの会

女性史研究の先達である山口美代子さんは座談の楽しい人でした。おいしいもの好きで、少しばかり飲む面々がさまざまな会合の後に集まって寄り道をするのが恒例になっていました。たまたまメンバーが東急東横線の沿線に住んでいたため、ＴＹ会と名付けたのは枝松栄さんでした。

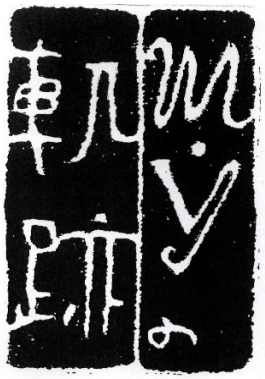
２０１７年４月から２カ月、鹿野政直・堀場清子夫妻が中心の「日米地位協定をよむ会」というハードな勉強会にも、山口さんと、聞き書きメンバーの枝松栄、矢野操、生方孝子は最後まで熱心に通いました。このとき山口さんは８８歳、たぶんこの会の最高齢だったと思います。そのうえ、週１回ボランティアで、市川房枝記念会の資料整理に通っていました。

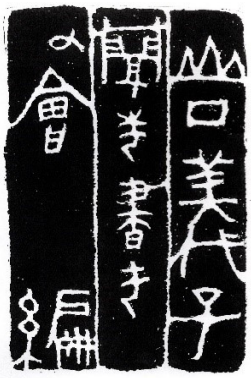
たまたま東横線の沿線の仲間になった江刺昭子さんを食事会に誘ったのがウンのツキでした。江刺さんは食べてはおしゃべりばかりしているメンバーに活を入れて、山口さんの聞き取りをすることがあれよあれよという間に決まってしまいました。こうして２０１８年３月７日を第１回に、５月１４日、７月３日、１０月１日、１９年３月１３日と計５回、山口家で聞き取りをさせていただきました。

生い立ちから始まり、横浜での小学校時代、朝鮮元山での女学校生活、敗戦による引き揚げ、父親の任地である北海道で図書館人として出発したこと、そして国会図書館入館、市川記念会での資料整理を中心にした退職後の仕事と順調に進み、補足をお願いしていたときに、体調を崩して１９年９月２５日、急逝されました。

没後、せっかくの聞き取りだから１冊にまとめようということになり、２０２０年１月から「山口美代子聞き書きの会」として編集作業を始めました。はっきりしない部分や聞き洩らしが多いため、１章のみ自分語りとし、２章から５章は聞き取りと資料を組み合わせた叙述にしました。６章はゆかりの方がたからの寄稿。最後に略年譜と著作・執筆目録をつけ、山口さんの人と仕事が一望できるようにしました。

山口さんは資料の発掘、整理、検証、刊行、公開の作業に携わり、アーキビストとしての仕事は半世紀を超え、歴史学に貴重な貢献をされました。ご自分の仕事を《女性と資料》と定め、卓越した見識と根気で大量の資料を用意して研究者との間に橋を架けてくださいました。その資料を活用して過去を検証し未来への展望を描くのは残されたわたしたちの仕事です。山口さん、ありがとうございました。



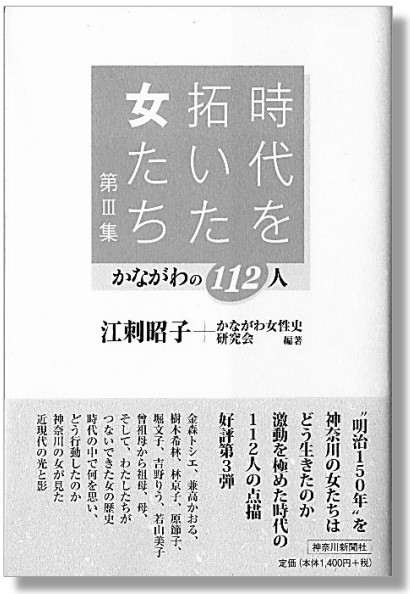


かながわ女性史研究会

私たちは歴史学の専門家と県内の女性史を研究する市民9人の集まりです。当会代表の江刺昭子＋史の会編著で神奈川新聞社より刊行された『時代を拓いた女たち』第Ⅰ集・第Ⅱ集に続く第Ⅲ集の発行を目指して、2016 年に発足しました。

1カ月に1回、横浜市西区の県民活動サポートセンターに集まって例会を開いて、3年後の2019年に『時代を拓いた女たち　第Ⅲ集　かながわの112人』を刊行しました。第Ⅰ集（2005年）、第Ⅱ集（2011年）とあわせ354人の人物を取り上げています。

会員はそれぞれ総合女性史学会、地域女性史研究会、史の会、グループ江藍、女性史に学ぶ会、六会文学サークルなどに所属し、研究活動を続けております。



『時代を拓いた女たち』第Ⅲ集
（2019 年）

かながわ女性史研究会ホームページでは

https://kanagawajoseishi.jimdofree.com/

『時代を拓いた女たち』第Ⅲ集掲載の 112 人の人物名とタイトル、刊行前に神奈川新聞文化面「イマカナ」に掲載のミニ評伝 10 編、会員の活動状況などを掲載しております。

会員の星賀が制作するこのホームページは美しく読みやすく内容が盛りだくさんです。インターネットで「かながわ女性史研究会」と入力いただければ検索可能です。情報収集や読み物としてもご満足いただけると思います。ぜひ、ご覧ください。

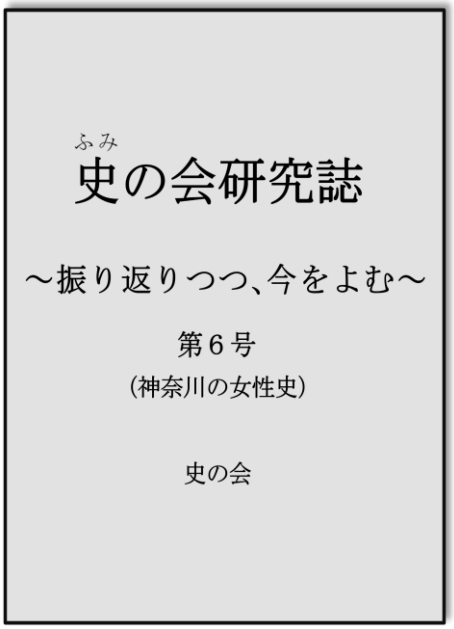
内容
- ・ホーム
- ・最新情報（当会会員の関わる講演会などのご案内、代表江刺昭子の時事評論一覧）
- ・『時代を拓いた女たち　第Ⅲ集・かながわの 112 人』（掲載人物名とタイトル）
- ・神奈川新聞版「時代を拓いた女たち」
- ・『時代を拓いた女たち』第Ⅰ集・第Ⅱ集（掲載人物名とタイトル）
- ・「史の会」とは
- ・「かながわ女性史研究会」について

＜会員＞　江刺昭子（代表）　小野塚和江　影山澄江　金子幸子
中積治子　野田洋子　星賀典子　三須宏子　横澤清子

号外 *「史の会通信」シンポジウムと交流会記念号*

2020 年 12 月 16 日発行

2020 年 12 月 16 日≪『史の会研究誌』6 号刊行記念シンポジウムと交流会≫を開く運びとなりました。ご参加くださった皆さまに心からお礼申し上げます。1988 年 9 月の初会合から今日までの記録を、研究誌の発行とシンポジウムを中心に辿ってみます。女性センター移転問題、アーカイブ設立の要望運動も大きな柱でしたので、主な動きを加えました。まず、6 号のご紹介から。



2020 年 7 月 21 日発行

【聞き書き】

・小野静枝―「横浜の大空襲を記録し、のちの世に伝える」
聞き手　江刺昭子

・室谷千英―「神奈川県の女性政策を担う」
聞き手　中積治子

・嶋田昌子―「活動の始まりは本牧の海から」
聞き手　安井恵子

・岡江照子―「かながわ女性センターで生涯学習を担う」
聞き手　影山澄江

【評伝】

・「高松ミキと座間村女子青年会の活動」　伊藤めぐみ
・「横浜のベル・エポックの時代を生きる－西川千代」
中積治子
・「金森トシエが求めた男女平等社会」　江刺昭子
・「能楽師 富山禮子の世界」　影山澄江
・「西條節子の華麗な『終活』」　三須宏子
・「牧野薊と牧野家の女たち」　安井恵子

≪女性史とわたし≫他

＜・＜・＜・＜・＜・　史の会　32年のあゆみ　略年表　・＞・＞・＞・＞・＞

年	月日	活動内容　（研究誌・人物事典発行とシンポジウムを中心に）
1988年	9月8日	『夜明けの航跡』大正期担当ワーキンググループ慰労会で、研究グループ結成を呼びかける（江刺）
1989年	4月6日	**「史の会通信」第１号発行**、発足からここまでのまとめ。編集・江刺昭子、題字とカットは江刺卓（14歳）
	6月15日	**神奈川県女性史戦後編の第１回ワーキンググループ打ち合わせ会**
1991年	8月1日	**『史の会研究誌―大正の響きをきく―』刊行　（第1号）**
1992年	12月5日	**『共生への航路―かながわの女たち　’45~‘90』完成**。発行記念シンポジウムに参加
1993年	10月12日	**第２号　『史の会研究誌―時代のうねりを見つめて―』刊行**
1994年	3月3日	**「史の会　シンポジウムと交流会」主催・史の会、県立かながわ女性センター生涯学習部との共催で開催** 若木千賀子、影山澄江、森山敬子が2号の題目で発表。コーディネーター・江刺、総合司会・安井、参加者92人 同時開催：写真展「国際交流のパイオニア～横浜の女性群像」
1995年	1月26日	江刺昭子『透谷の妻―石阪美那子の生涯』を出版。出版記念会「お話とティーパーティー」を開催。グループ江藍、萌黄の会、笹りんどうの会、六会文学サークル、横須賀女性史の会に呼びかけ参加者多数
	12月9日	**「女がヒロシマを語る会」**のシンポジウム開催に協力。講師・加納実紀代、関千枝子、堀場清子、江刺昭子
1996年	7月1日	**第３号　『史の会研究誌―時代の目覚めをよむ―』刊行**

1997年	3月13日	**史の会シンポジウムと交流会開催（主催・史の会、かながわ女性センター生涯学習部）** 中積治子、中内むつ、三須宏子が３号の題目で発表。コーディネーター・江刺、司会・若木。参加者69人
	9月5～6日	**第7回全「国女性史研究交流のつどいinかながわ―新ミレニアムへの伝言」開催　　於：県立かながわ女性センター** 延1200人参加。資料保存、公開のアピールを出す
1999年	11月25日	３回連続**「女性団体自主企画講座」**開催。11月25日、江刺昭子「文学に描かれた＜老い＞の季節」。 12月2日、西條節子「自立と共生、高齢者グループリビング」。　　12月9日、鈴木スム子「かけがえのない生命を精一杯いきるには」　司会・若木、大岡。会場花・受付・録音・接待・設営を担当
2001年	2月15日	**『史の会研究誌　第４号―女たちの物語を再生する―』刊行**
	7月5日	**「女と男、ともに拓く地域の歴史―研究発表と地域女性史交流のつどい」**、かながわ女性センターと共催 チラシとプログラム担当安井。記録、茶菓、クロス、小花の用意、講師の送迎等を分担。研究誌販売 第１部　4号題目で安井恵子、大岡八重子が発表 第２部 4人トーク「地域女性史から今をよむ」永原和子、宇佐美ミサ子、折井美耶子、江刺昭子、参加者147人
2002年	10月21日	女性センター移転について県民部と話し合い。移転でも図書の散逸、廃棄を避けるよう要望
2005年	4月1日	**江刺昭子＋史の会編著　『時代を拓いた女たち　かながわの131人』出版　（第Ⅰ集）**
	4月17日	**『時代を拓いた女たち　かながわの131人』出版記念会（横浜　キャメロットジャパン）出席者126人**
	9月3～5日	「第10回全国女性史研究交流のつどいin奈良」で、中内むつ「『時代を拓いた女たち　かながわの131人』を刊行して」を発表
2007年	11月11日	**江刺昭子、かながわ女性センター開館25周年記念事業・講演会「かながわの女性史を振りかえる」** 史の会、江藍のメンバー主体で茶話会を催す。役割分担いつもの通り、女性史グループなど参加者多数
	12月13日	神奈川新聞連載　タイトル**「魅せた！かながわの女（ひと）―史の会が描く群像」**に決定。毎週金曜日文化面に連載
2008年	1月4日	**連**載の第１回目がスタート。江刺昭子「与謝野晶子・歌人　今も新しい女性賛歌」＊2010年2月５日、100人で終了
2009年	3月17日	県議会の県民企業委員会で口頭陳述（江刺）、他のメンバーは揃って傍聴
	10月21日	**「地域女性史交流inかながわ―鎌倉・小田原・厚木の女性史刊行を記念して」を開催** コーディネーター・江刺昭子、総合司会・森山敬子、史の会パネリスト・若木千賀子
2010年	9月4～5日	**「第11回全国女性史研究交流のつどいin東京」**で、江刺は「地域女性史資料保存問題―神奈川での実践」を発表 江刺、山辺、森山、若木参加、山辺は主催事務局
	11月3日	江刺昭子、第59回神奈川文化賞受賞。県民ホールで授賞式（作家活動及び地域女性史研究）
2011年	6月30日	**第Ⅱ集　江刺昭子＋史の会編著　『時代を拓いた女たち　かながわの111人』出版**
	10月15日	**第Ⅱ集出版記念講演会「もう一度会いたい！あの人に！『時代を拓いた女たち―かながわの111人』　出版を記念して」** 開催。（於：横浜開港記念会館　６号会議室。講演者・山崎洋子氏（作家）、小柴俊雄氏（横浜演劇史研究家） コーディネーター・江刺昭子
2014年	11月20日	**江ノ島・かながわ女性センターとのお別れ会「再び、かながわの女性史を振りかえる」を主催。** 司会とお話・江刺昭子　　館長、司書ほか館関係者も出席。県内女性史グループが現状報告。参加者多数
2015年	9月19日～21日	「第12回全国女性史交流のつどいin岩手」に江刺、中積、三須が参加。中積治子「女性史資料の保存と公開」部門で「かながわ女性センターの移転縮小と女性史資料の保存問題」と題して発表 最終日全体会のコーディネーター・江刺昭子　　「史の会通信」325号（2015年11月19日）に報告
2016年	5月20日	**『史の会研究誌　第５号―「武相の若草」を読む』発行**
	7月26日	『時代を拓いた女たち』　第Ⅲ集作成のため「かながわ女性史研究会」を結成、9人参加
2019年	7月26日	**第Ⅲ集　江刺昭子＋かながわ女性史研究会編著　『時代を拓いた女たち　かながわの112人』出版**
2020年	7月21日	**『史の会研究誌　第６号―振り返りつつ、今を読む―』刊行**　（「史の会通信」№379）
	9月17日	Women’s Action Network(WAN)のミニコミ誌部門に『史の会研究誌』5～6号を載せる　＊１～４号は2013年に掲載

地域女性史研究会代表・折井美耶子の挨拶

こんにちは、わたし、地域女性史研究会の折井美耶子と申します。

今日の史の会研究誌の発刊記念のシンポジウム、本当にすばらしい内容だったなあと思います。「神奈川の女性の明日を拓く」というテーマで、それがコロナの今日、「明日を拓く」という前向きのテーマでとてもすばらしかったなあと思います。中身も本当に充実していてとても面白く、楽しく拝聴させていただきました。

第１部の室谷さんと嶋田さんのちょっと性格の違ったお二方の掛け合いというのもなかなか聴きごたえがございましてね、わたしはそのなかで、第１部はとくに女性史とあまり関係がなかったものですから、よけいに面白かったのですけれど、なかでも嶋田さんがおっしゃった男の子も入れてやるという話が非常に面白くて。

わたしは、そうですね、５０年近く社会教育の課程、日本史とか女性史の講師をつとめてきたのですけれども、社会教育の場でいろんな講座を聞きにくるのは女性が多いんですよね、中年の。そのなかに男性がちらほらと入っていることがありまして、その男性が二色に分かれる。１人は非常に熱心に、真摯に聞いてくださるんですけれどね、別のグループの方というのは、なんだ女の講師がみたいな顔してね、冷やかし半分で聞きに来るんです。そして自分の意見を滔々と述べる。そうすると、わたしがとやかく言う前に、女性の受講生たちがそれに対して反論をしますと、ものすごく怒って憮然としてもうこんな講座には来るもんかと、そういうタイプの方がいらっしゃる。

だいたいリタイアする前は大きな企業の課長とか部長とかえらい役職についていた方ではないかなあと思うんですね。そういう方は自分の言うことを部下たちはご無理ごもっともと聞いてくれるわけですから、自分と意見の違うことを人が言ったりすると、それだけで腹がたってしまうんですね。そういうようなことを経験しておりましたので、嶋田さんのおっしゃった男の子も入れてやるというのがなかなか面白くって、やっぱり地域での活動のなかでは、全く平らな関係でいろいろなことをやっていかないと成りたっていかないということですね。

そこで今日のテーマですけど、「神奈川の女性の明日を拓く」という、本当にそれにふさわしいような、実はこの神奈川に今日ご報告してくださった方たち、ここに９人並んでいらっして、９つのグループがこの県下にある。ほかに小田原がありましたよね、小田原を入れると１０の、まあ文学の方もいらっしゃるけれども、女性史に関するグループがこんなにたくさんあるということ、すごい、神奈川ならではだなあと思いました。

わたしは地域女性史研究会で全国の地域女性史をやっている方と連絡があるんですけれど、やっぱり県下に１つあればいいくらい、もちろん無いところもたくさんあるわけなん

ですが、そういうなかでやっぱり神奈川は先進県だなあとすごく思いました。思い返しますと、やっぱり第１部の話にもありましたけれども、女性センターが全国に先駆けて最初に江の島にできました。すごく立派な女性センターで、そこで第３回の「全国女性史研究交流のつどい」というのをやりまして、わたしもその時、委員の１人として参加させていただいたんですけれど、先ほども橋が長いのよねという話がありましたけれど、つどいはちょうど夏の暑い時で、その暑い盛りのなかを皆さんが長い橋を渡ってぞろぞろとやって来るのを見ましてね、全国にこんなにたくさんの女性史を勉強する人がいるんだということで、すごく感動したことを覚えております。

そのつどいにアメリカの女性史研究者の方がいらしてたんですね。その方が私にね、日本にはこんなにたくさんの女性史研究者がいるんですかってびっくりなさった。まあ専門の女性史の研究者というのは、本当に数えるほどしかいなくて、ほかの方はやはり地域のなかで、いろんな活動をしていたり勤めもしてたり、子育てをしてたりそういう人たちが地域に根付いたところで、研究しているんです。へえそうなんですかっていうふうに、すごくアメリカの女性がびっくりしたのをとても強く覚えています。

ここにいらっしゃる方もそういう意味では本当に専門の女性史研究者という方は少ないと思うんですけれど、そういう方たちが地域に根ざして、地域の女性たちの歩んできた道を、調べてそして書き残していくっていうことは、とても素晴らしい仕事ではないかなあと私は思っております。神奈川にこんなにたくさんの地域女性史研究会があって、とても力強くてうれしかったんです。

わたしは、地域女性史研究会という全国の女性史研究をしている人たちの会をつくっております。２０１４年３月に発会いたしまして、今年は７年目になります。なかなか大変なものですから、会報は年に３、４回出しておりますが、会誌は隔年ということで今年ようやく２号をだしました。表紙だけ見ると、中身はわからないので、なかなかお手に取っていただけないかもしれませんけれども、神奈川だけでなく、全国にいる女性史の研究者たちがいろんな研究をした、論文は１つですけれど、その他もろもろを地域の実情なんかを「東西南北」なんていう形で書いたりしております。

今回はこの２号を編集している時に、コロナの真っ盛りになりましたので、わたし、ちょうど１００年前のスペイン風邪のことを思い出しました。着物を着た女性たちがマスクをして歩いている写真が残っているんですね。あの当時からマスクをしてたんだなあなんて思いまして、このコロナ禍もいずれは終息すると思いますし、それは５０年１００年たって１つの歴史的な事実になるんではないかと思って、それぞれの方に「コロナの今」という形で書いていただいたのがあります。急遽差し込んだ企画になっておりますが、是非お読みいただければと、今日持ってまいりました。

本当にこのコロナ真っ盛りで三密が言われているなかで、こういう会を神奈川の方たちが催してくださったというのは大変ありがたく、嬉しいことだと思っております。今日は、最初から聞かせていただいて、なかなか面白くて、それぞれのグループの人たちは、いろんな苦労をしながら、研究し、調べ、そして書き残して、冊子を出してというようなこと

をやっております。今、全国の地域女性史研究を担っている女性たちは、比較的高齢化してるんですね。なかなか若い人たちが入ってくださらない、けれどもやっぱりこの大事な仕事を是非これからも皆さん、頑張って若い人たちも誘って女性史研究を盛んにしていただきたいと思います。わたしたちの会誌の副題が「ここに生き　ここを超える」というタイトルなんですね。やはり地域というのはここにわたしたち生きているわけです。だけど、そこだけで完結するんではなくて、そこを超えていくという、そういう生き方も含めての女性たちの歩みというのを書き残していっていただきたいなあと思っております。なるべく早くコロナが終息して、そしてまたこういう会が開かれるといいと思っております。

実は地域女性史研究会は例会を年に２回か３回行っております。１回は東京でやりますけれど、もう１回は、いろんな地域でやることになっております。本当は、今年、神奈川を予定していたのですけれど、コロナでそれができなくなってしまいました。全国からの人たちをお招きするわけにいかないので、来年の秋を神奈川で例会というふうに予定しておりますので、ぜひその時には、またご参加いただければと思います。

今日はすばらしい会を催していただき、ありがとうございました。

Kaz.

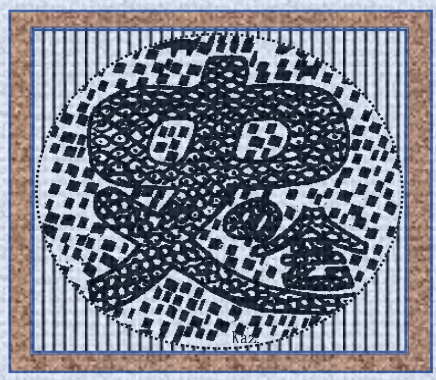
閉会の挨拶・江刺 昭子

時間がオーバーしかけておりますけれど、折井さん、全国組織の地域女性史研究会を代表して、ありがとうございました。

今日はコロナが感染拡大してどういうことになるかと、ずっとハラハラしていましたけれど、なんとか無事に終えることができました。ありがとうございました。

４月ですか、緊急事態宣言が出まして、図書館も閉まる、それから全部の公共的施設もクローズになる。それで、研究会も講演会もちょっとした集会も全部できなくなってしまったんですね。これは戦時中みたいな状態だというふうなことをおっしゃる方もありましたけれど、どうなることか、闇の中にいるみたいな気がしました。こんな状態でうちに籠っていてはいけない、ステイホームをしない、気を付けながらですけれど、なるべくわたしは外に出て、いろいろやってまいりました。今日もこのような会をですね、自粛したほうがよいのではないかという、忠告が複数ありました。お申し込みいただいた方からの直前のキャンセルも３０人ほどありまして、対応に右往左往しました。でも、なんとかこういう形で開催できまして、皆さんご参加いただきまして、本当にありがとうございました。

どうぞ気を付けてお帰りください。

Kaz.

発行日　　２０２１年７月
編　集　　史の会
発行責任者　江刺昭子